

第四章 古墳時代





中丸・三ツ石古墳分布図



中丸・三ツ石古墳遠望

**位置と立地** 茶畑中丸地区は、富士山の溶岩流によって形成されたところで、平坦部分は田や畑となっていたが、現在、大部分は住宅地となっている。中丸古墳は、この溶岩流の露出した台状の地形とそれに続く斜面に、三基ほど連続して存在していた。三ツ石古墳は、中丸古墳の東一〇〇mのところにあったという。

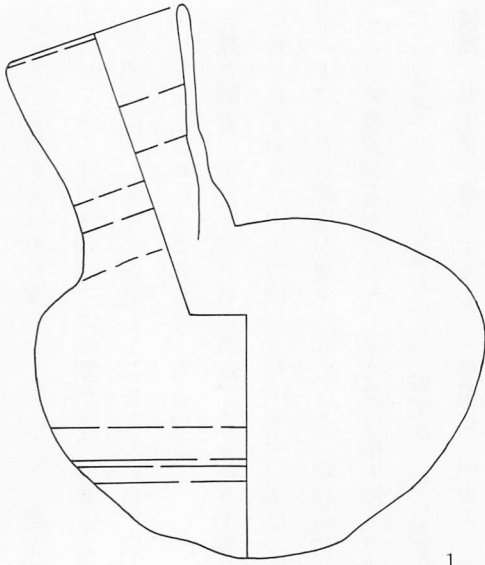
**発見と調査** 中丸・三ツ石古墳は、古くから土地の人々に「塚」として知られており、中丸古墳のうち中央の一基は「宮方塚」といわれ、石室の上に一石五輪塔が建てられている。昭和の初め頃、静岡県史編さんのため確認調査が行われ、本古墳は南から一号墳、二号墳（宮方塚）、三号墳、三ツ石古墳とされ、県史第一巻に記載された。

**遺構** 県史第一巻によると、一号墳は、中央の二号墳の南一四〇一五mのところにあつたが、昭和三年（一九二八）一月頃、開墾のため破壊され消滅した。その時、地面の下に溶岩の割石で組んだ長さ四・七m、幅一・二〜三m、深さ〇・六mの長方形の石室があり、天井石には凝灰岩を用いてあつた。石室のなかにはへぎ石で組んだ、組合式石棺があつたらしい。二号墳は墳丘はなく、石室が露出し、天井石の上には「宮方」と刻んだ一石五輪塔が建てられている。現状での石室の長さは約五・五m、幅約一・五mあり、内部は不明である。三号墳は、二号墳の北約二〇mのところにあつたが、一号墳と同じく、昭和三年（一九二八）一月頃、開墾のため破壊され消滅した。その時、地下〇・六mのところ、溶岩の割石で組んだ長さ四・二八m、幅一・五二m、両端幅一・二m、深さ約〇・七五mの長方形胴張りの石室があり、その中央に結晶片岩を薄く割って組合わせた、長さ一・九二m、幅約

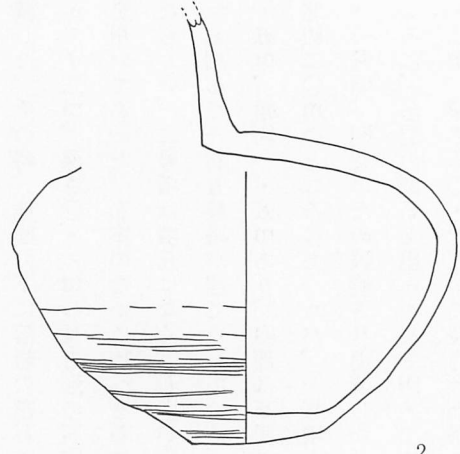
〇・五m、深さ約〇・三mの石棺があり、蓋に一〇枚の同岩の板状のものを、瓦をふいたように乗せてあつたとする。三号墳には、石室の天井石が一枚もなかったもので、古く発掘されていたものであろうという。三ツ石古墳は、石室の石材だけ大きなものが三個ほど残っていたので、かなり以前に発掘されたものであろうとする。なお芹沢充寛は中丸古墳周辺を踏査し、中丸古墳東方の台の上に、溶岩の割石を用いて地表に「塚」を築き、長さ四m、幅二・五m、高さ一・五m、頂上部に石灯笼らしいものが置かれ、その周りに「へぎ石」が掘り出されてあつたとする。

**遺物** 県史第一巻によると、一号墳から須恵器の平瓶二個、甕二個、刀身の残片が出土し、三号墳からは同じく坏破片と刀子の残片が出土したとする。図は、中丸古墳出土の須恵器として伝えられてきたものである。1・2は平瓶、3は甕、5は坏身である。4・6は甕の破片で、6はその口縁を図上で復原した。共に焼きがあまり軟質である。古墳時代後期の七世紀代のものと思われる。

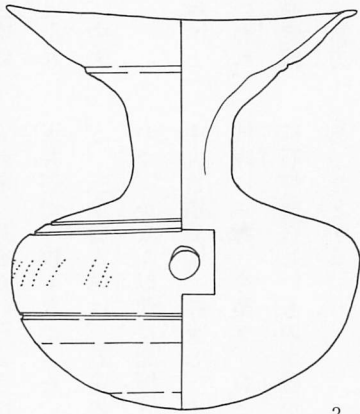
**遺跡の特徴** 一〜三号墳は南北に並び、ほぼ同時期に築造された後期古墳群の一つとみてよからう。位置図は、中丸古墳群を中心として、ほぼ同じ時期の須恵器、土師器片の散布する地点を示したもので、北は茶畑一帯から南は麦塚まで広い範囲にまたがっている。江戸時代後期に刊行された「駿河記」の麦塚の項（巻三三の駿東郡之三）によると、「この村里古塚多し、座頭塚とあり」、また茶畑の項には、「十三塚茶畑平松の界にあり。（中略）大小の塚二つあり。小塚は先年里人塚を発しに、石櫃に片石の蓋あり。内に朽骨計りにて分明ならず。また



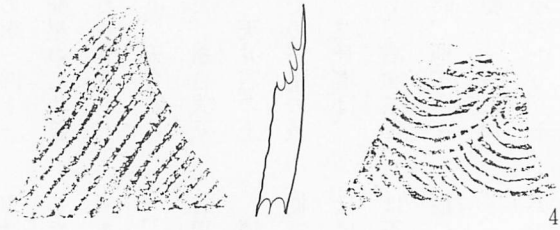
1



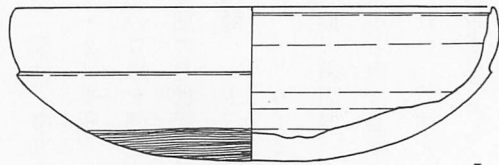
2



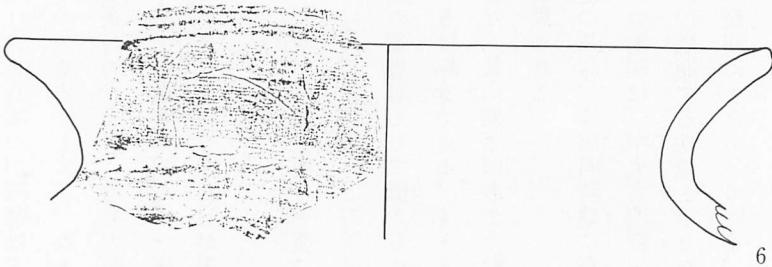
3



4



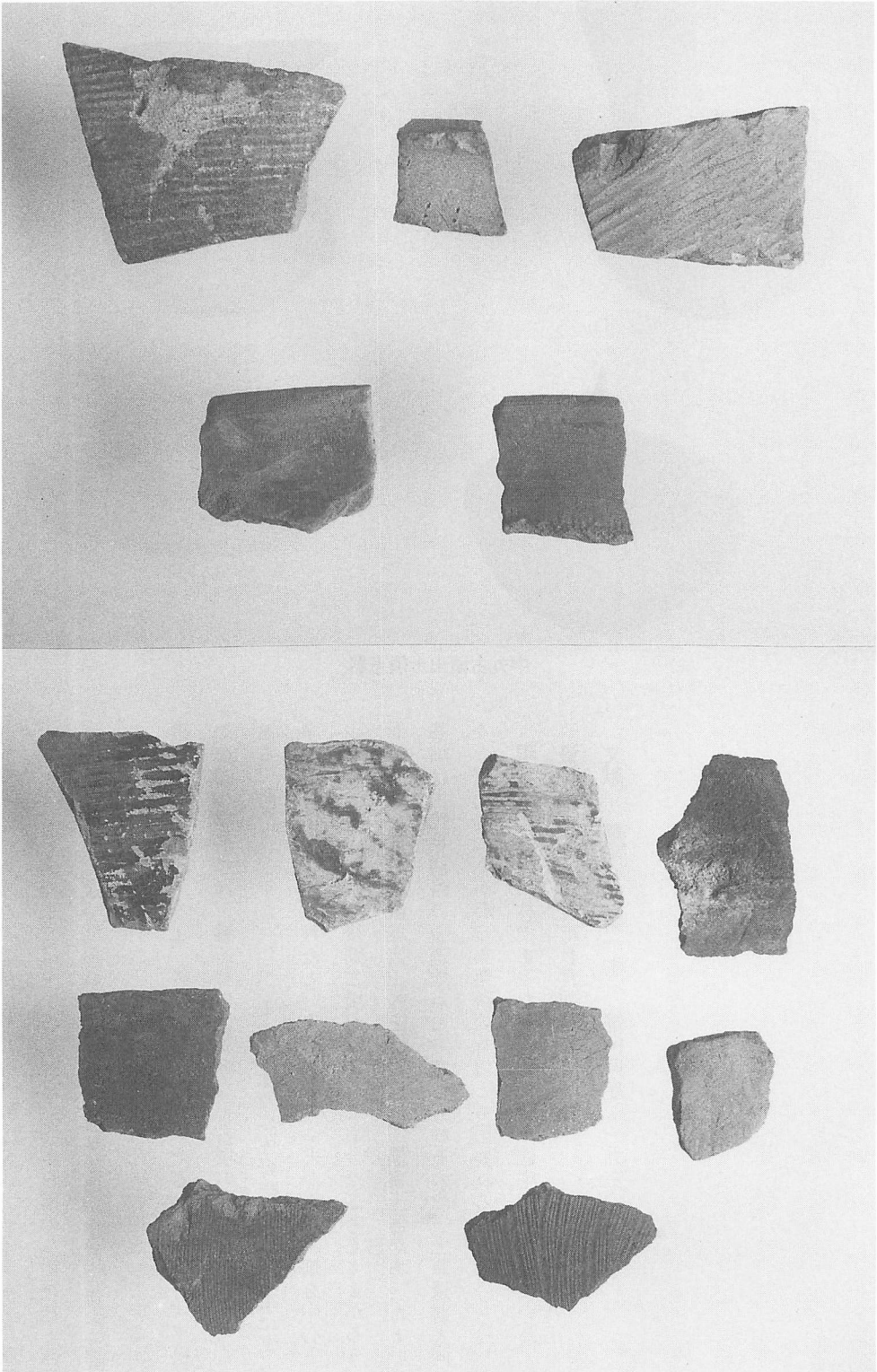
5



6

0 10cm

中丸・三ツ石古墳出土須恵器・土師器実測図



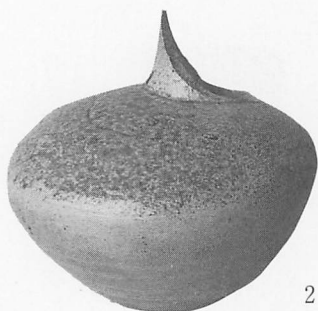
中丸・三ツ石古墳出土土師器・須恵器



1



3



2



5

## 中丸古墳出土須恵器

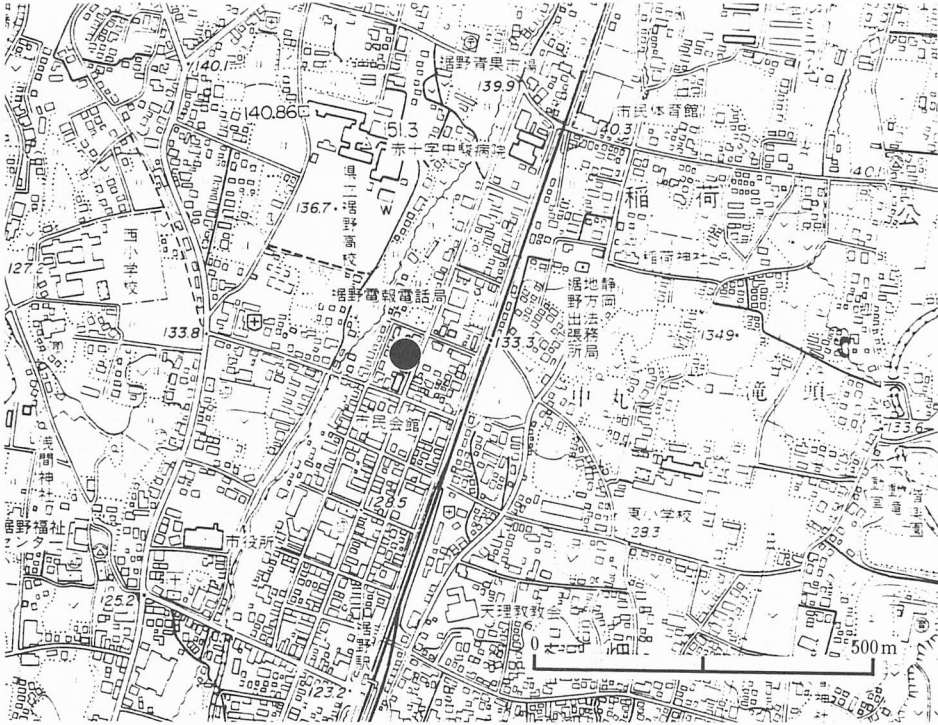
元の如く埋置しと云。(中略)総て不浄の者あたりへ行ば必崇たたりをなすとて里人恐れあえり。又俗に座頭塚と云。」という記事があり、茶畑の十三塚は、公図の上では平松の裾野駅東側から南の八幡神社と西南側の佐野原神社を含めたところで、「駿河記」では、建武二年(三三五)二月一二日、足柄、竹之下合戦の新田軍戦死者の地としているが、記事の内容を検討すると、後期古墳らしく思える。なお佐野、平松地区の公図小字名には、盤若塚、供養塚など古墳の存在を暗示するものがある。明治二〇年(一八八七)、東海道線及び佐野駅の建設工事によって、多くの古墳が破壊されたという。以上のことから、茶畑を中心として、少なくとも十数基の後期古墳が群としてあったと考えてよからう。なお、茶畑天理教会敷地出土の土師器には、墨書土器があったという。茶畑は古代足柄路の通過地点とも考えられるので、上原遺跡と同じような交通路にかかわる集落跡のものとも思われる。

現状 畑地、山林であったが、大部分は住宅地となっている。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

文献 「静岡県史第一巻」 静岡県庁 一九三〇

所在地 裾野市佐野字柳畑七八四番地



位置図



わらび手刀出土地



**位置と立地** 裾野市街地のやや北寄り中央部に位置する。西側を黄瀬川の支流小柄沢川が流れ、北から南へ向かってゆるい傾斜をなす平坦地にある。

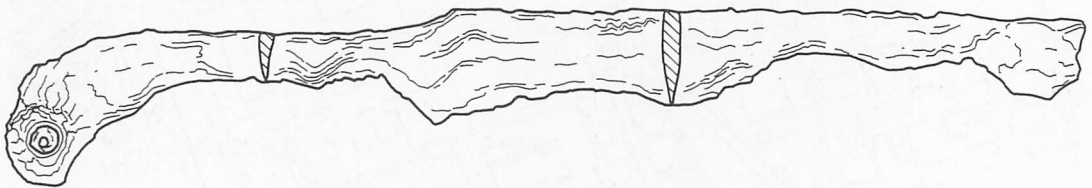
**発見と調査** 昭和二四年（一九四九）頃、当時の金子製作所が工場敷地の造成工事中、地下約三尺（約九〇cm）のところから、わらび手刀が茶色の土器と共に出土したという。

**遺物** 出土したわらび手刀の現長は二九・二cm、刃部長さ一八cm、刃先は欠損している。刃重ね約〇・五cm、柄長さ約一〇cm、柄頭は湾曲し、先端部に銅製の下げ緒環<sup>おかかん</sup>がある。腐食著しくわずかに原形を保っているにすぎない。腐食状況からみて、折り返し鍛えの板目肌であったろうと思われる。柄頭の特徴からわらび手刀である。伴出遺物が不明であるので明らかでないが、古墳時代後半のものであろう。

**遺跡の特徴** 裾野市内のわらび手刀出土地として、須山滝ノ沢と共に注目してよい遺跡である。

**現状** 市街地となっている。

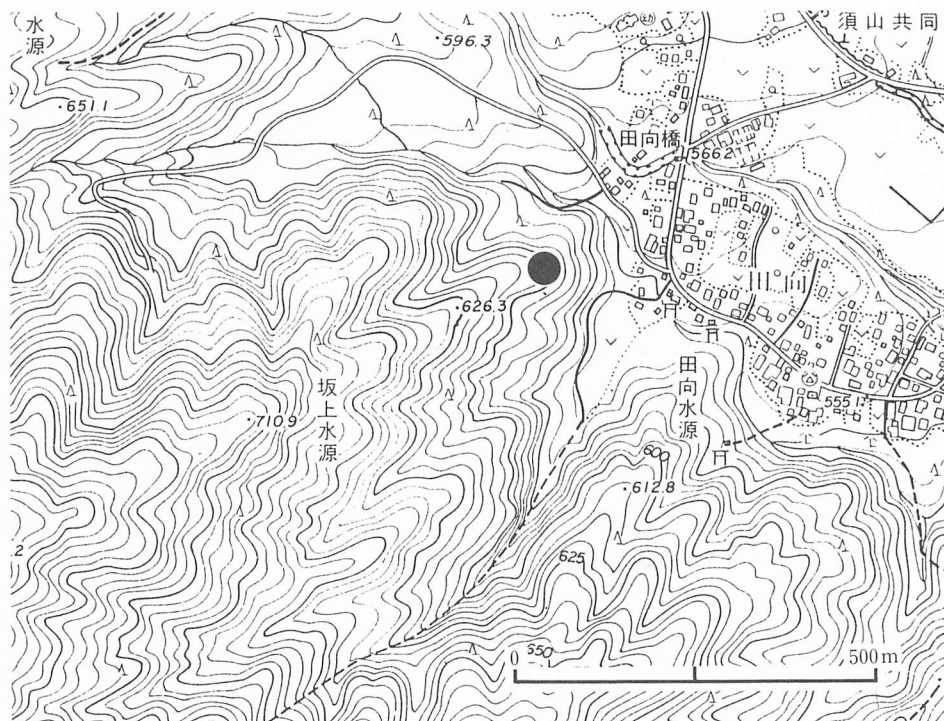
**文献** 渡辺徳逸「蕨手刀の出土状況」 裾野郷土研究第8号 裾野郷土研究会 一九七七



柳畑遺跡出土わらび手刀実測図・写真

滝ノ沢遺跡  
たきのさわ

所在地 裾野市須山字滝ノ沢



位置図

**位置と立地** 愛鷹山の位牌岳から北東に延びた尾根の、海拔六五〇m付近で南東に突き出た鞍部頂上に位置していたという。この地点の下の麓付近の平地には、奈良時代の土器片があったと伝えられている。

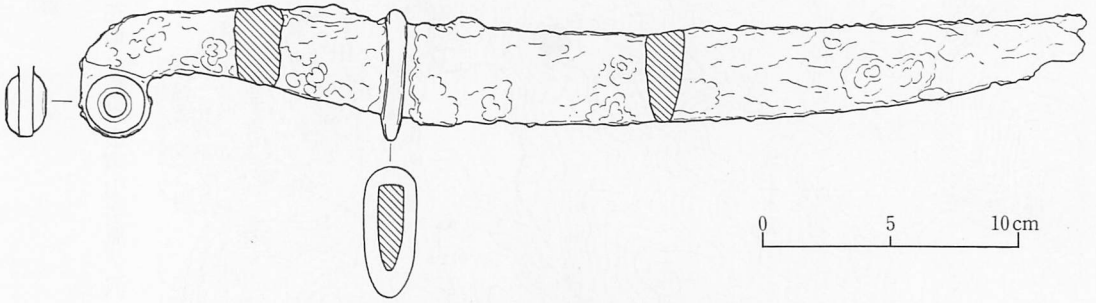
**発見と調査** 昭和三十一年（一九五六）六月、須山九七一一番地の根上喜作が、杉アラクに播いた陸稲の耕作中、鋤の刃先にわらび手刀が当たったため、引き出したもので、地下一〇cmぐらいのところ、直に突き刺さっていたとする。鋤の刃は、ちょうど刀の柄の先端に当たったという。昭和三十二年（一九五七）三月、日本大学教授軽部慈恩によって調査が行われたが、遺構・遺物は検出されなかった。

**遺物** 出土したわらび手刀の現長は三〇・九cm、柄長さ九・四cm、柄頭は湾曲して先端に銅製の下げ緒環おかんがあり、環中央の緒を通す管は銀製である。刀身は鞘に納まっているため不明である。全体は腐食が著しいが、奈良元興寺文化財研究所で保存処理を施してある。形態からみて「わらび手刀」である。

**遺跡の特徴** 古墳であったと思われるが明らかでない。もし古墳であったとすれば、古墳時代後半のものであろう。

**現状** 山林となっている。

**文献** 渡辺徳逸「滝沢古墳」 須山地方の古代 一九七六



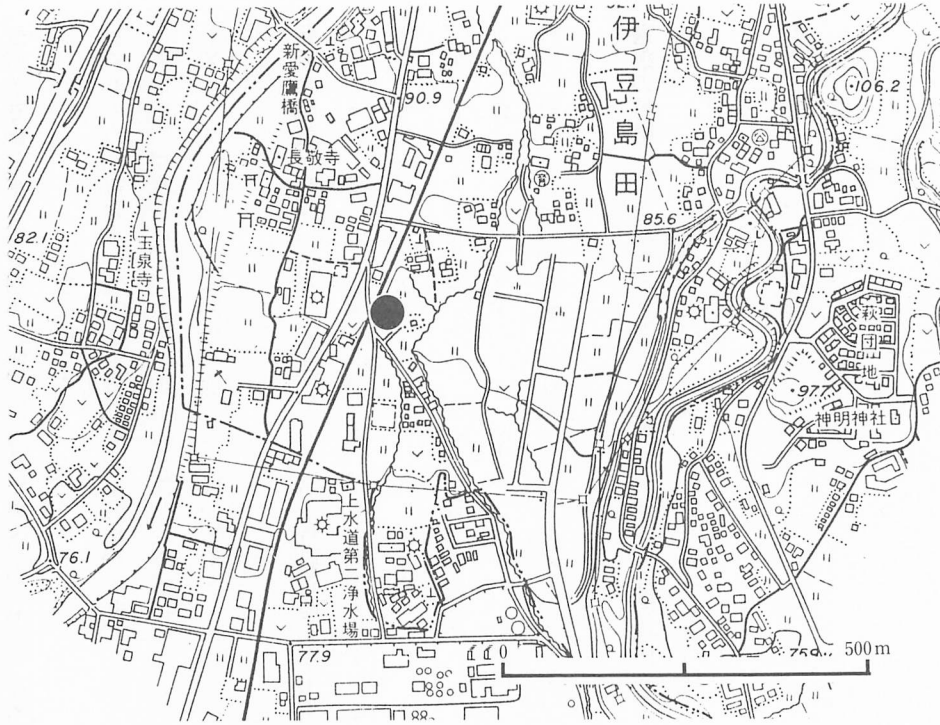
滝ノ沢遺跡出土わらび手刀実測図



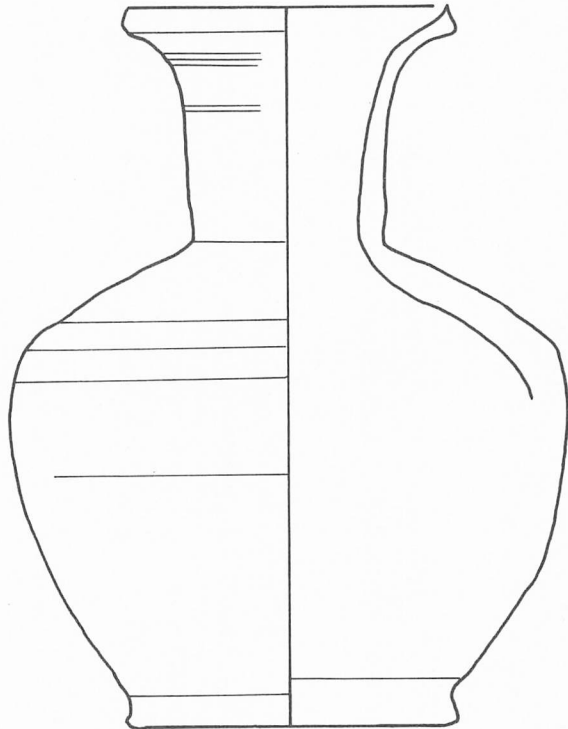
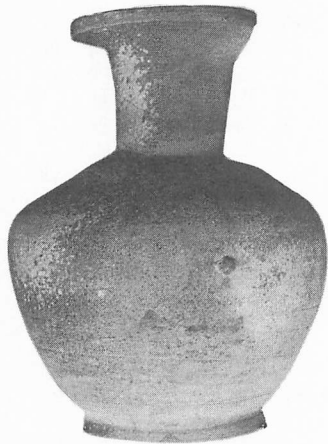
滝ノ沢遺跡出土わらび手刀

水窪高田遺跡  
みずくぼたかだ

所在地 裾野市水窪字高田一〇九番地



位置図



水窪高田遺跡出土須恵器

**位置と立地** 裾野市南部の水窪、伊豆島田地区は、境川と黄瀬川の

間にひろがる、ゆるやかな傾斜をなす平坦地であるが、旧黄瀬川から枝分かれた川の形成した数本の南北に走る凹地があり、そのうち一本は久保田川用水となり、水田と畑が入り混じって縞状をなしている。須恵器は、この久保田川の凹地に面した上段の水田から出土したという。

**発見と調査** 昭和二八年（一九五七）五月、富士特設道路（旧国道二四六号）の建設工事で盛土をするため、この地点を掘削中、須恵器がマサ層から同質の破片、木炭のようなものと共に発見されたという。

**遺物** 出土した須恵器は、灰青色をなし、硬く焼き締まる。頸部と胴部の一部に灰白色の自然釉がある。高さ一三・六cm、胴部径一〇・六cm、底径六・三cmの切高台。長径壺で、七世紀後半のものとと思われる。

**遺跡の特徴** この地点から南の長泉町にかけて、古墳時代後半の小円墳が群集し、古墳群を形成している。後期小円墳の上部が削平されていたものとも考えられる。

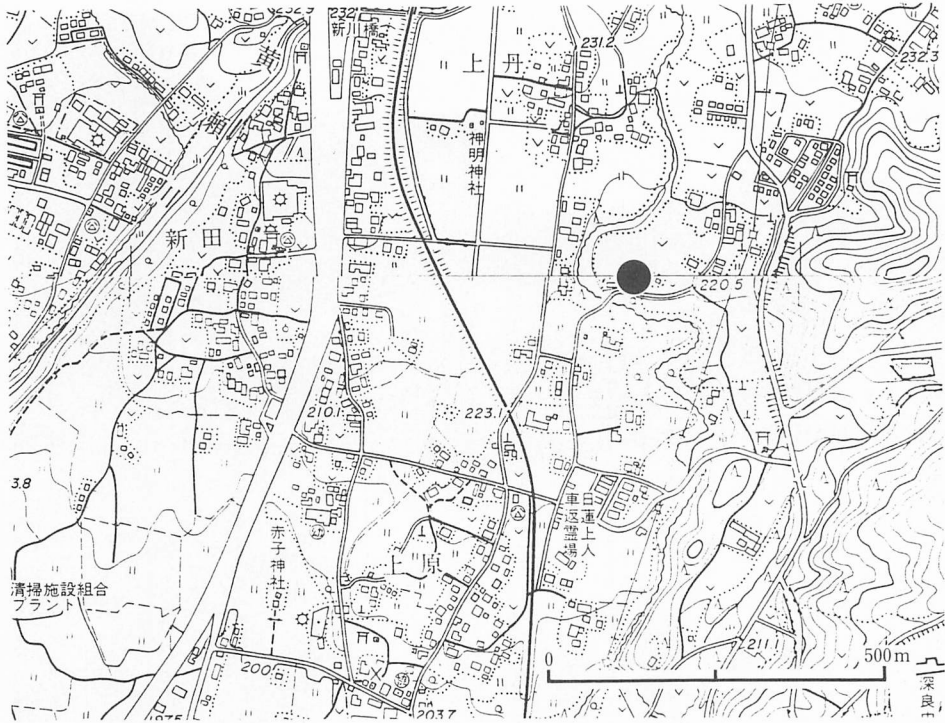
**現状** 水田で一部は住宅地となっている。

**文献** 渡辺慎一、芹沢充寛「水窪出土の須恵質土器」

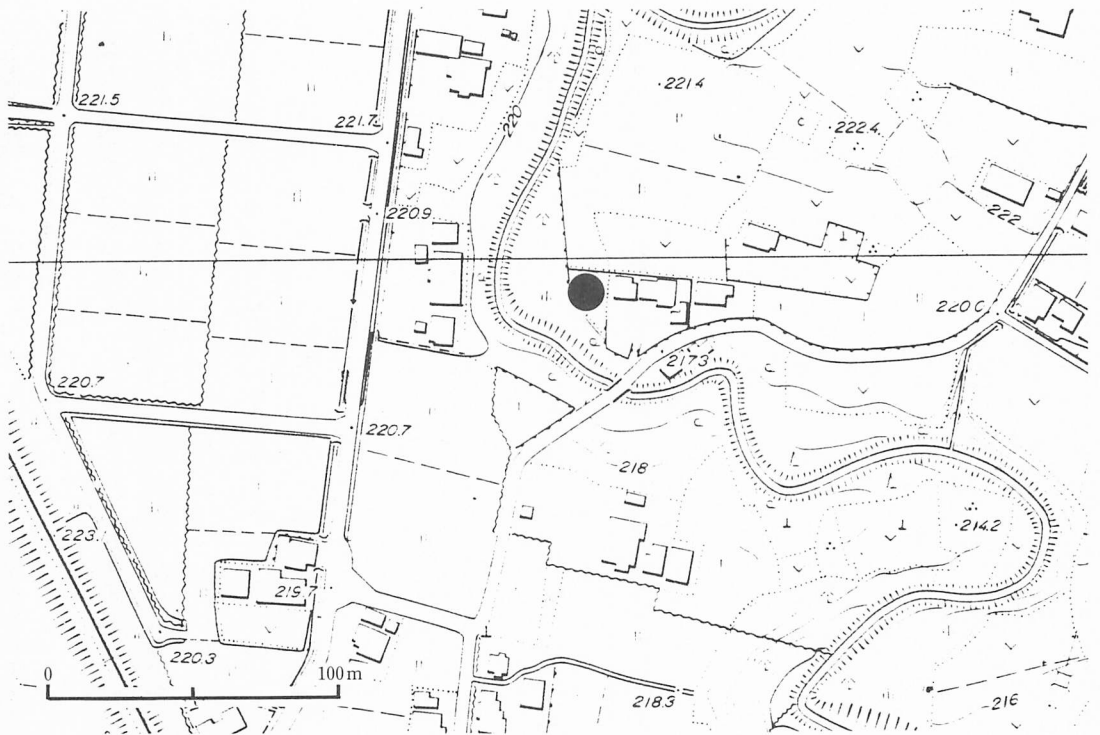
（用語解説）

**須恵器** 五世紀の頃、朝鮮半島南部から陶作りの工人集団が渡来して、大阪府南河内郡狭山町の陶邑古窯群（すゑむら）で作り始めた陶質の焼物で、丘陵の斜面に造られた登窯（のぼりがま）で一〇〇〇度以上の高熱で焼かれたため、硬質で灰青色をしており、叩くと金属的な音がする。ただ釉薬が掛けられていないので陶器と区別されている。製作にはロクロを用いるが、大形の甕は粘土紐を巻き上げて形をつくり、整形に叩きしめるので、内外面に平行、むしろ状、格子目、同心円、渦巻状の叩目文がみられる。器形には、高坏、蓋付坏、長頸壺、横瓮（よこづい）、甗（はらう）、平瓮（ひらか）、提瓶（さげびん）、盥盤（うせん）、鉢、皿などのほか大小の壺、甕があり、多様な種類がある。須恵器の生産は、五世紀の後半から六世紀に入ると、大阪府から三重県、愛知県、静岡県の西部や島根県の出雲地方、石川県能登地方へ広がり、七世紀代には全国的に生産されるようになる。しかし生産地は良質の陶土を産するところに集中している。須恵器は祭祀や古墳に埋納される供献用のものと、日常の用器に分けられるが、八世紀に入って古墳の衰退と共に供献用須恵器の生産は低下し、代わって日常用具の坏、盤、皿や貯蔵用の大形壺、甕が量産化されるようになる。八世紀の後半になって愛知県濃尾平野の東部で、灰釉陶器（かいろ）の生産が始まると須恵器の生産は急速に衰え、一〇世紀には陶器に入れかわる。茶畑中丸古墳出土の須恵器は供献用のもので、深良上原遺跡出土のものは日常用具の坏である。そのほかの市内遺跡出土の須恵器は、小破片で古墳のものか日常用具のものか、明らかでないものが多い。

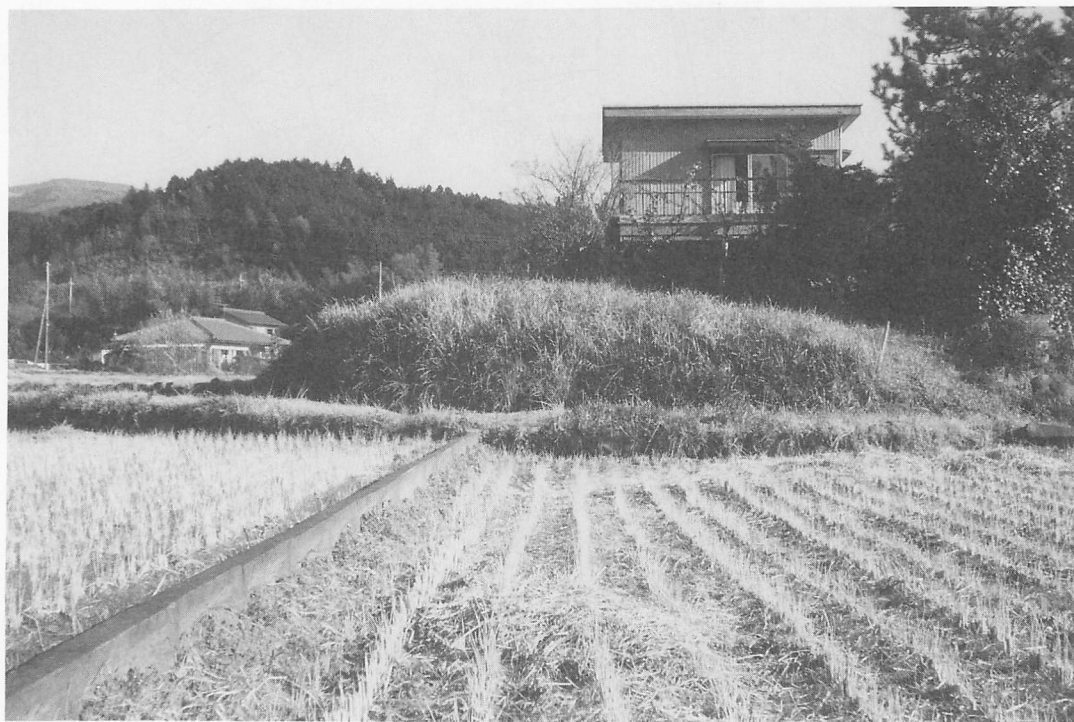
所在地 裾野市深良字原三〇一七番地



位置図



立地図



上丹古墳全景

**位置と立地** 本古墳は、深良の原地区南端の、深良川が大きく迂曲する内側の台状地形末端部に位置する。

**発見と調査** 静岡県史第一巻 原史時代 「駿東郡及び沼津市の遺跡」の項によると、「中丸の北約四・三軒を距てた深良の御屋敷に長径一・一米、短径六・三米、高二・五米の略卵形をなせる古墳がある。其東北二十七米の地点にも類似の一墳があったが、今は除去されてゐる。」とあって、昭和五年（一九三〇）の時点で古墳の存在を報告している。

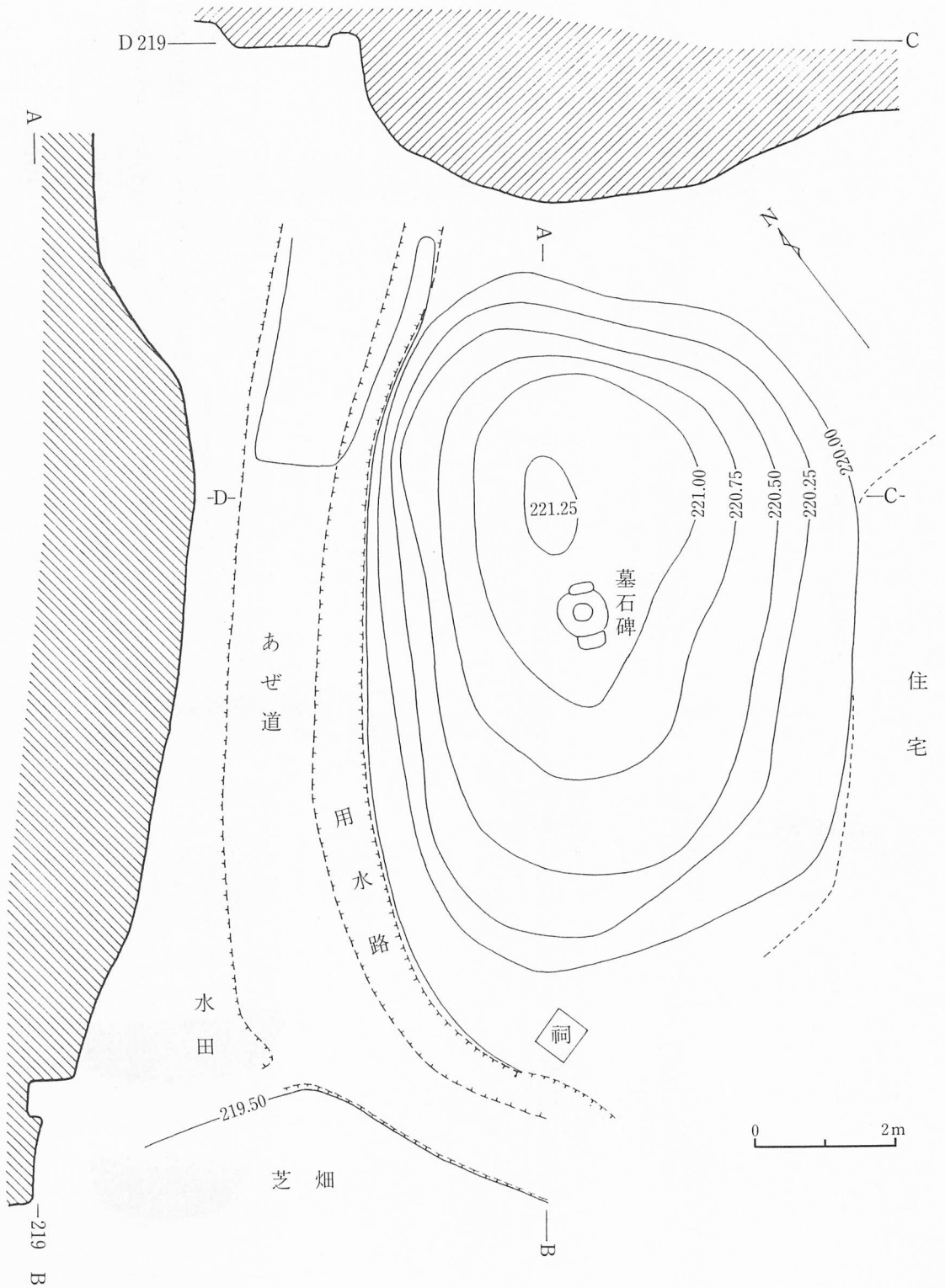
**遺構** 平成三年（一九九一）、市史編さん事業のため実測調査をした結果では、現存の墳丘は長径九・八m、短径六・九m、高さ一・二五mあり、西側裾部が用水路で削られているが、ほぼ卵形をしている。

**遺跡の特徴** 本古墳は、裾野市内で墳丘がみられる唯一の古墳である。古墳時代後期の小形円墳とみてよからう。

**現状** 墳丘の頂部に墓碑があり、このため保存状態は比較的良好であり、未発掘と思われる。

文献 「静岡県史第一巻」 静岡県庁 一九三〇

（注）伊禮正雄「御殿場地方の中世城址」（御殿場市史研究1 御殿場市史編さん委員会 昭五〇）によると、ここは深良川の迂曲部を利用した大森氏の居館で、その土塁の残存したものであるとしている。また土地の人の伝承では、ここを御屋敷、古屋敷というのは旧勝又家の屋敷で、この塚は、昔からあったもので手をつけると「たたり」があるので残してあるという。



上丹古墳墳丘図



所在地 裾野市茶畑字道場山七六〇番地ほか

位置と立地 縄文時代 道場山遺跡参照

発見と調査 裾野市道場山遺跡調査概報によると、「弥生式土器と須恵器も少量出土している」とある。

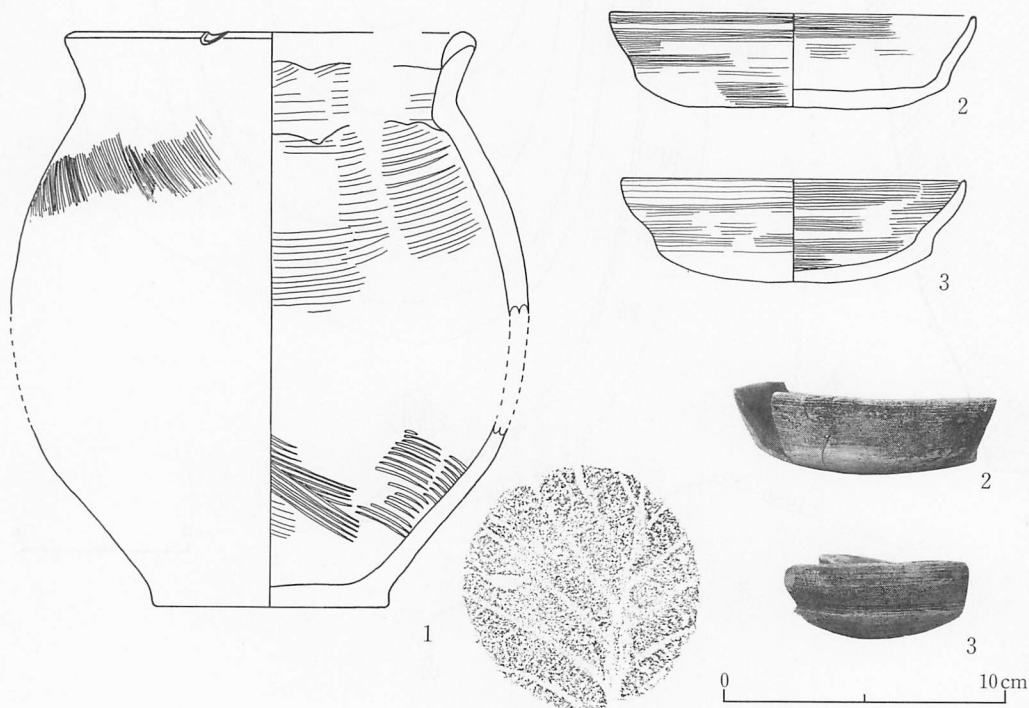
遺物 縄文土器以外に保管されてきた遺物は、図のように土師器である。1は、図の上で復原したもので、胴部破片がなく接合できない。口径一四・五cm、高さ約二〇cm、底径八・四cmの甕形土器で、胎土に多量の粗砂粒を含み、表面は剝離しているが、芯は硬く焼き締まる。口縁上端は内側に丸く折り返し、口縁上は丸く盛り上がる。内外面に斜、横方向の荒い刷毛目の整形痕がある。底部は木葉底である。2・3は同じ形態の坏である。胎土は良質の粘土で、灰色に硬く焼き締まる。これは発掘調査区A-VI-c区(五一頁参照)から出土したとする。古墳時代後半、七世紀代のものと思われる。

遺跡の特徴 道場山遺跡は裾野市内の代表的な縄文時代遺跡であるが、伝承によると古墳らしいものがあったという。甕形土器は住居址のあったことを思わせる。

現状 ほとんど住宅地となっている。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

文献 笹津海祥ほか「裾野市茶畑道場山遺跡発掘調査概報」 裾野市教育委員会 一九七六



道場山遺跡出土土師器実測図

58 天神山・屯屋敷遺跡

所在地 裾野市茶畑字屯屋敷

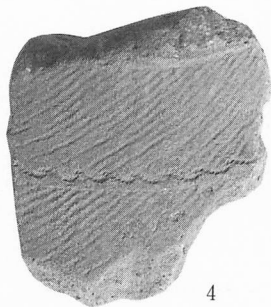
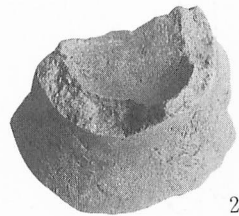
位置と立地 本遺跡は、箱根外輪山の三国山から、南西に延びた尾根の末端の丘陵上に位置していた。(縄文時代 天神山・屯屋敷遺跡 参照)

発見と調査 昭和四八年(一九七三)、本遺跡の発掘調査では、縄文時代遺跡とされていたが土師器が表面採集されており、重複した遺跡であることが判明した。

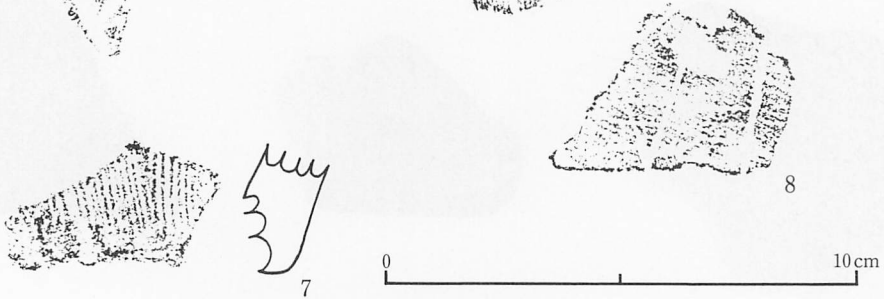
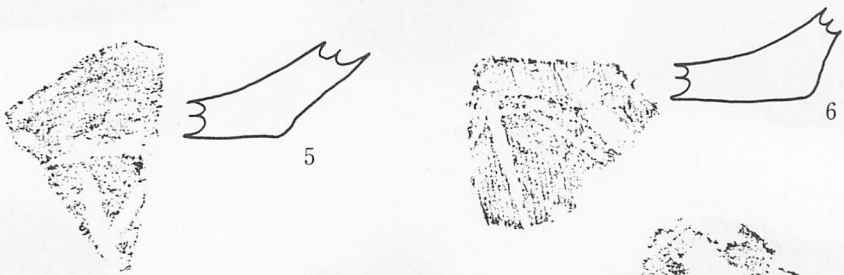
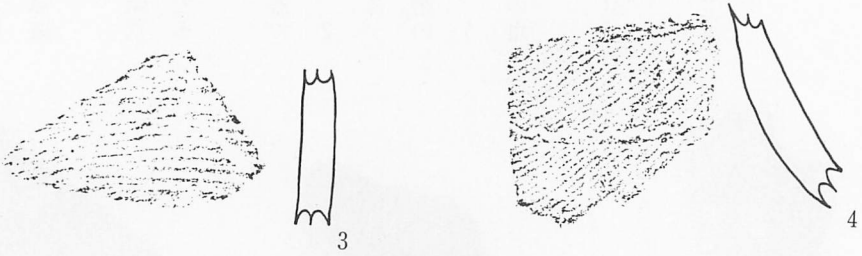
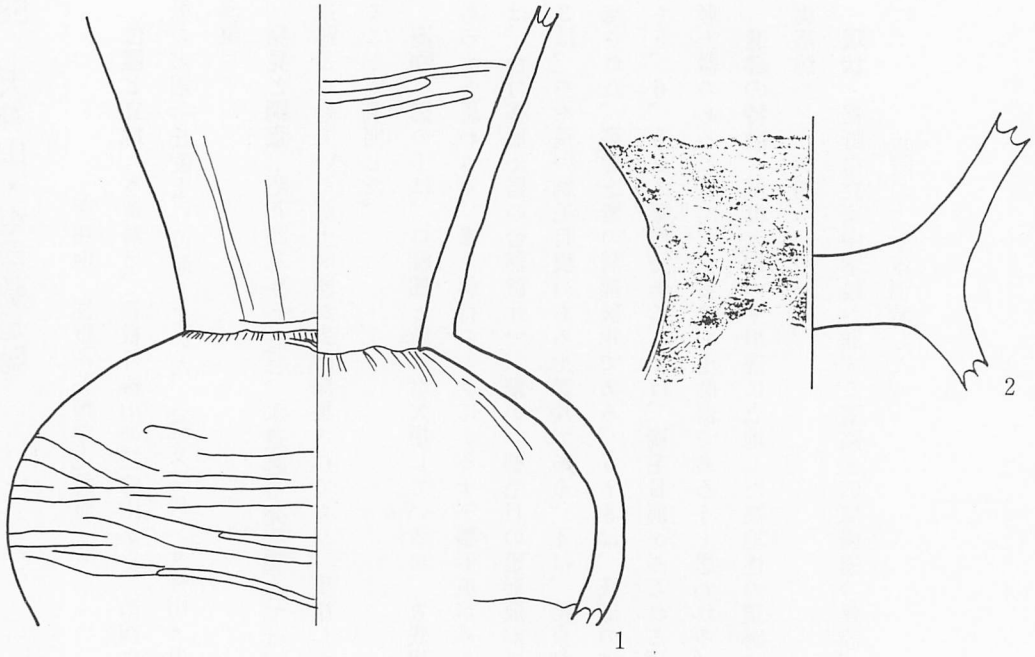
遺物 図の1は、口縁部と底部が欠損しているが、丸底卍形土器であろうと思われる。横と斜行のヘラによるナデ整形痕がみられる。2は、台付甕形土器の台部破片で、細かい刷毛目の整形痕がみられる。3は、やや荒い刷毛目痕のある土器片である。4は、結束細縄文帯の施された、甕形土器の肩部破片である。5〜8は、底部の破片で、うち5、6は木葉底である。7は、刷毛目痕がみられる。丸底の卍形土器のあることから、古式の土師器であろうと思われる。

遺跡の特徴 尾根末端の平坦部に立地した高地性の遺跡であるが、集落跡かどうか明らかでない。

現状 裾野市立東中学校へ通ずる道路と広域農道の建設、土取工事によって、丘陵の大半は消滅した。



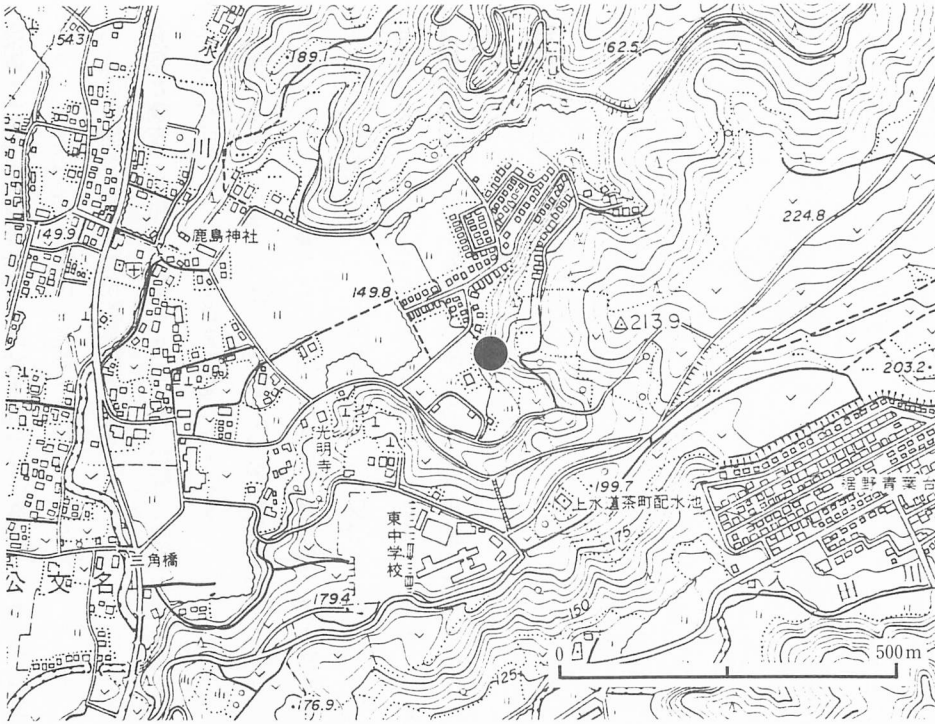
屯屋敷遺跡出土土師器



屯屋敷遺跡出土土師器実測図・拓影

公文名田向遺跡

所在地 裾野市公文名字田向六四四番地



位置図



立地図

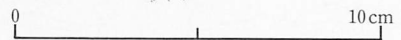
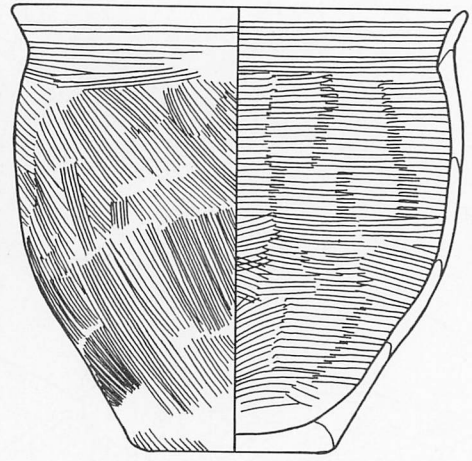
**位置と立地** 箱根外輪山の西麓末端の丘陵斜面、公文名字田向に位置する。公文名光明寺裏山の東側は袋状の小さな入谷となっており、その入谷に面した東側の丘陵斜面に立地する。

**発見と調査** 昭和五九年（一九八四）頃、裾野市立東中学校生徒が、田向の丘陵斜面から、この土器を発見したという。

**遺物** 高さ一二cm、口径一二・五cm、胴最大径一二・三cm、底径五・五cmあり、小形甕である。胎土に細砂を含み硬く焼き締まる。九单位前後の櫛歯状器具による、密な整形痕が顕著にみられる。底部は木葉底である。胎土、焼成、形態などから土師器と思われる。

**遺跡の特徴** この土器だけ丘陵の斜面から単独に発見されたというだけで、その性格は不明である。

**現状** 山林である。



公文名田向遺跡出土土師器実測図・写真

60 城ヶ尾遺跡 じょうがお

所在地 裾野市深良字城ヶ尾三八〇五番地ほか

位置と立地 本遺跡は、箱根西側外輪山である湖尻峠、三国山、山伏峠の傾斜の緩やかな山麓末端の、海拔二六九・六mの丘陵上にある。

(縄文時代 城ヶ尾遺跡参照)

発見と調査 本遺跡は、昭和五二年(一九七七)、裾野市立深良中学校が城ヶ尾に移転建設されることになり、建設に先立って予備調査を実施したところ、新たに発見された遺跡である。調査は、南地区と北地区に調査区を設定し、発掘調査が進められたが、古墳時代の遺構・遺物は、南調査区のA—h区を中心に検出された。

層序と遺構 石囲い炉がA—h区土塁に近い位置から検出された。調査区全体がすでに攪乱されていたが、遺構は茶色土層下部から構築時の状態で発見され、炉址は、四五cm×三五cmの大きさで、安山岩質の板状の四個の石をコの字形に組み合わせてあった。炉石は、検出面より高さ一五cmあり、一五個埋め込まれており、炉石内側は赤褐色の焼痕があり、長期間の使用が認められた。炉址の周辺から土師器、須恵器が十数片出土した。A土坑は、A—h区の炉址から北側二・二mの位置に検出された。平面形は楕円形で、長径一六〇cm×短径一一三cmあり、検出面から深さは三四cmあった。覆土は、一層は黒褐色土で、スコリアを多量に含み、二層は茶褐色で砂粒を含まず、断面は皿状を呈し、覆土はレンズ状に堆積していた。遺物は木葉底の土師器が土坑底部から平状に出土し、その他土師器、須恵器片が四片出土した。B

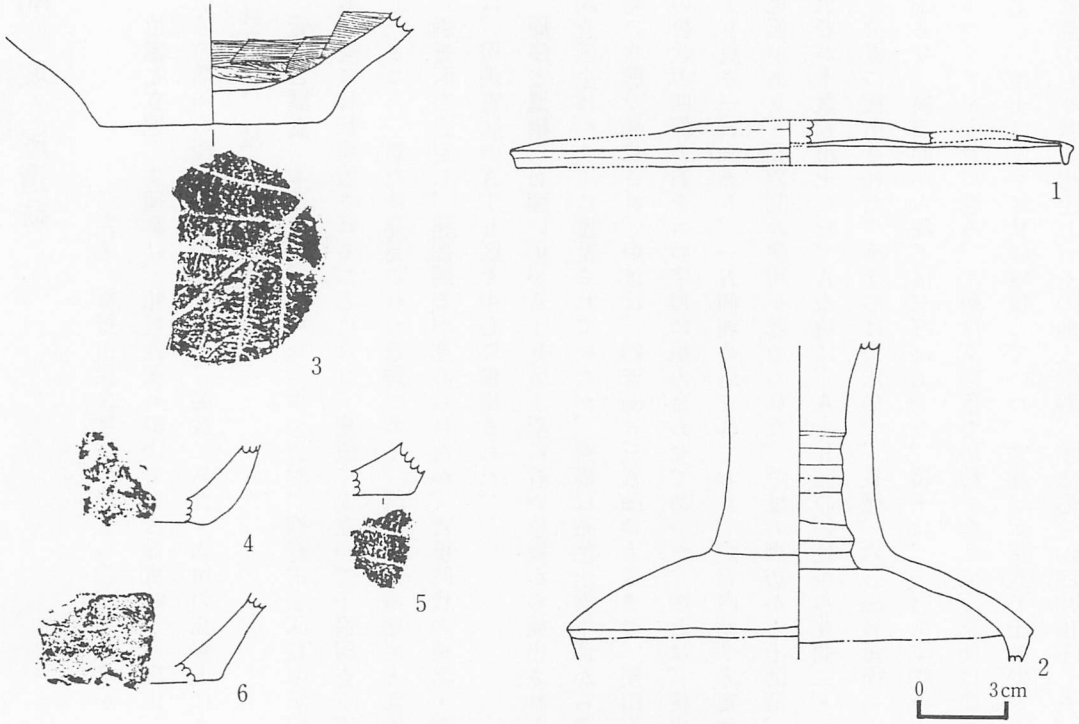
土坑は、A—h区北側二・八mの位置から検出された。長径一三二cm×短径一〇六cm、深さは検出面から四〇cmあり、楕円形で断面皿状の底部は、さらに柱穴状に掘りこまれていた。覆土の一層は黒褐色土で小石を多量に含み、二層は茶褐色土で小石を含まず粘性があり、三層は茶褐色土で若干の小石粒を含んでおり、覆土はレンズ状に堆積していた。遺物は、覆土の二層から土師器が流入した状態で出土した。

遺物 出土した遺物は、須恵器三五点、土師器一〇六点、陶磁器片八点、計一四九点である。遺跡は攪乱されており大半は浮いた状態で出土した。遺物は、炉址、土坑が検出されたA—h区に集中し、II層の茶色土層からの出土と思われる。須恵器の長頸壺が二点A—h区から出土し、頸部直径は、それぞれ四・五cm、五・三cmと推定される。

長頸部から肩部にかけて黄褐色の自然釉が一面に見られる。うち一点は内面に条線が施され、灰白色を呈し焼成は良好である。壺の肩部一点が見られるが、直径一四・五cmを測り、外面は長頸部と同様に自然釉が一面に見られる(第1図2)。

壺口縁部はA—h区から出土し、外面にロクロ痕があり、外面に自然釉が見られる。口縁は外返し、口唇部はラップ状に開いている。また外面に淡緑黄色の釉が意識的に施された壺も出土し、内面は灰白色、外面に条線があり、釉で濃淡文様となっている。蓋の縁も、三号土坑上部から出土し、外面にロクロ痕を残し、灰白色、焼成は良好である(第1図1)。

土師器は甕形土器の口縁部が、A—h区から五点出土。口縁部は外返し、緩やかな「くの字状」を呈する。うち、折り返し口縁があるも



第1図 城ヶ尾遺跡出土須恵器拓影・実測図

の四点で胎土に砂粒子を含み、色調は茶褐色、焼成は良好である（第2図）。

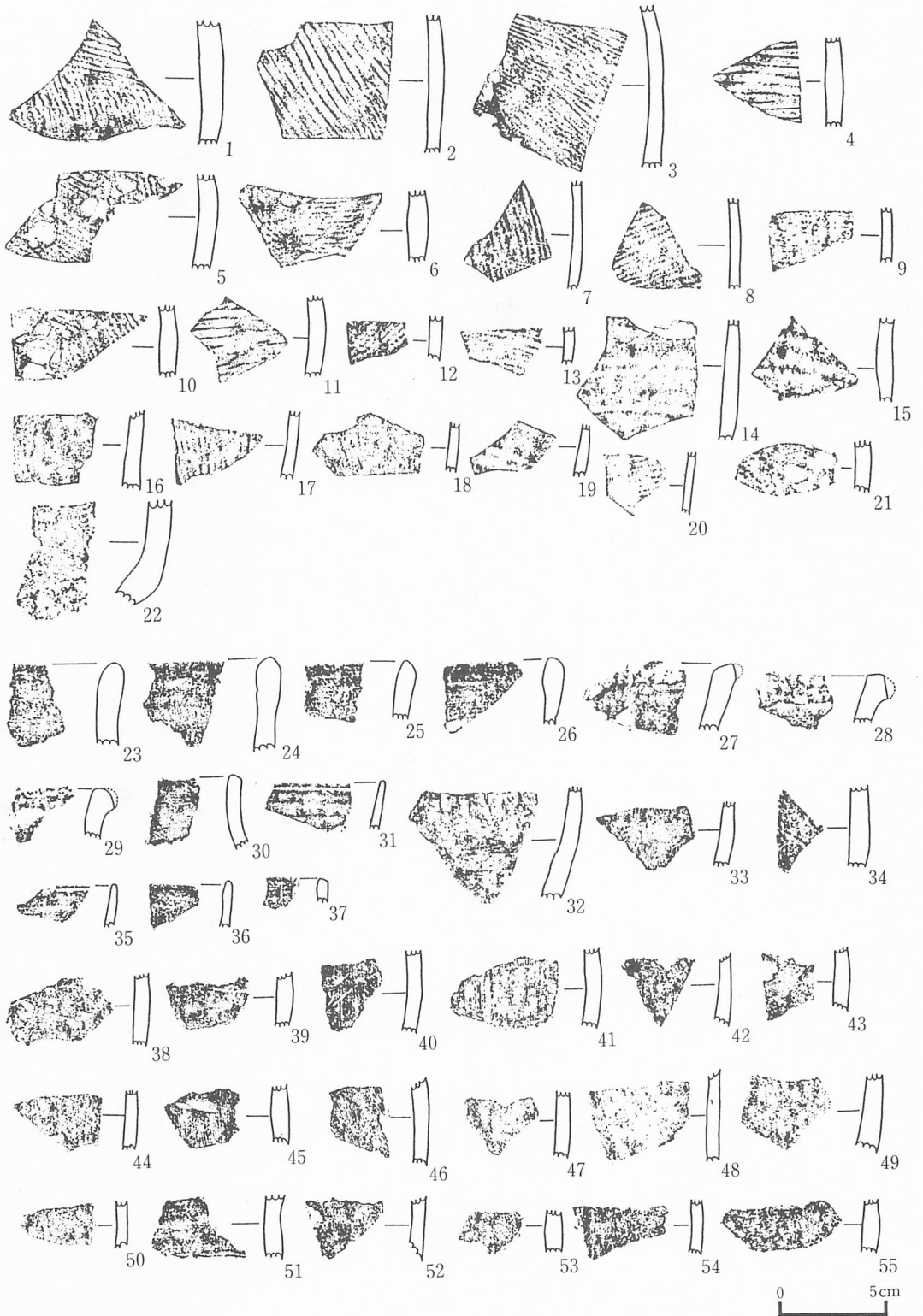
底部破片はA—h区六号土坑内から二点出土し、木葉底である。焼成は良好で、内面は櫛状線文が見られ、底面は調整痕が残されている。また、甕形土器の底部一点がA—h区から出土したが器形は不明である。破片群も多量に出土しているが、小破片で器形は不明である。大半は内面に櫛状線文と調整痕が見られる（第1・2図）。

**遺跡の特徴** A—h区から検出された炉址と土坑は、土師器・須恵器の出土状況から見て、古墳時代の遺構と推定されるが、小規模で遺物量も少なく、一時期、祭祀的な目的で営まれたものであろう。

**現状** 裾野市立深良中学校敷地となり、完全に消滅した。

**資料の所在** 裾野市教育委員会 保管

**文献** 笹津海祥ほか「裾野市深良城ヶ尾遺跡発掘調査報告書」 裾野市教育委員会 一九七七

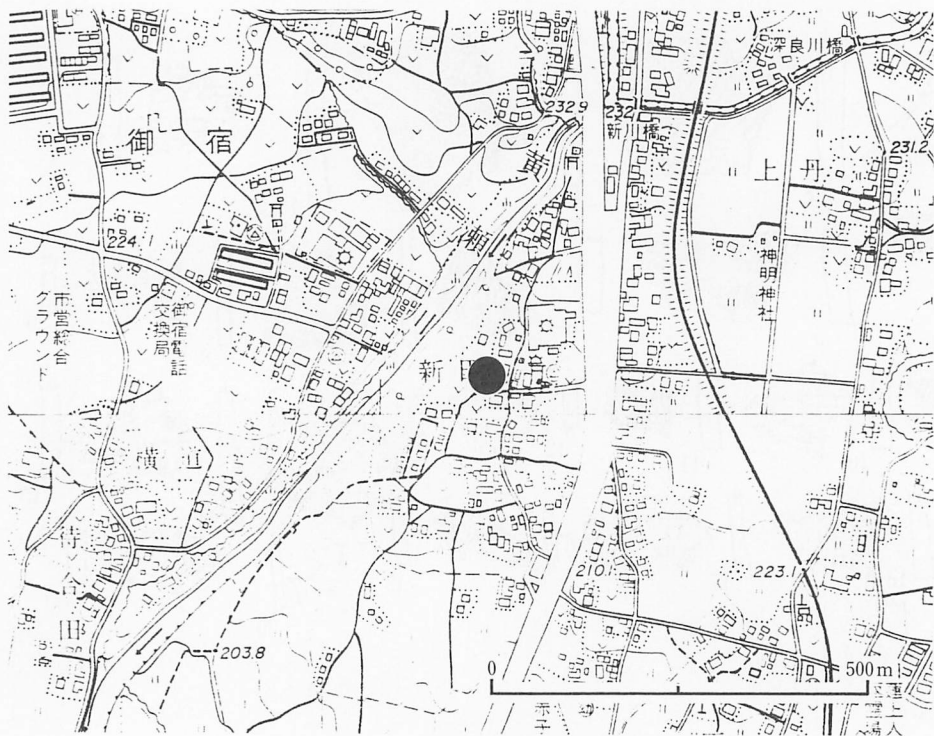


第2図 城ヶ尾遺跡出土土器拓影



# 61 カラウト遺跡

所在地 裾野市深良字カラウト一一九五番地



位置図

**位置と立地** 富士山東南麓の末端の、富士山溶岩流上に形成された沖積平坦地、海拔約二一七m付近の深良新田カラウトに位置する。西側を黄瀬川が流れている。

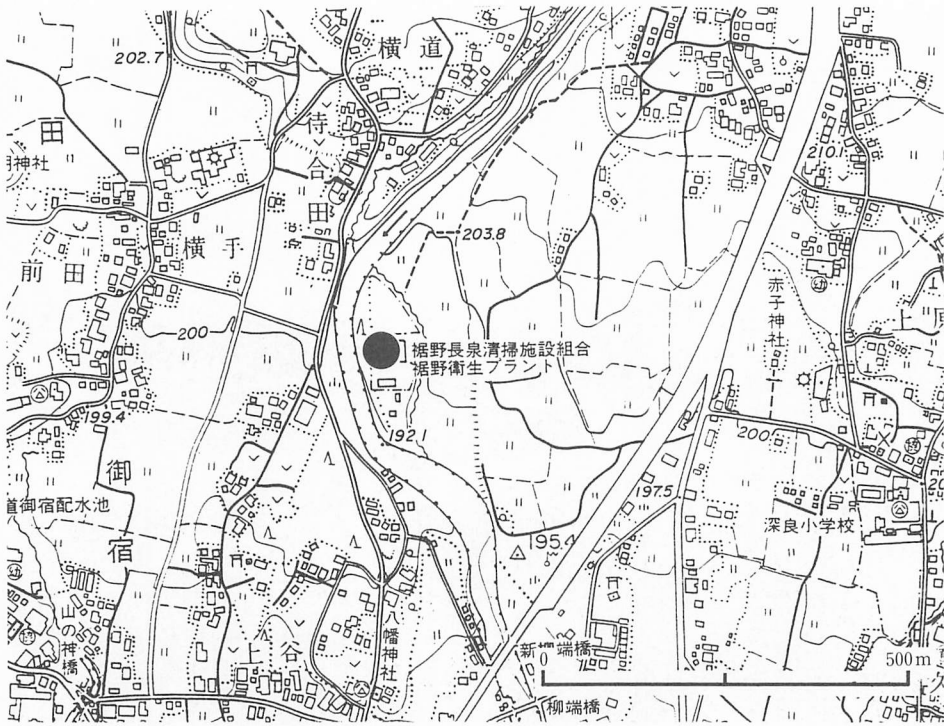
**発見と調査** 昭和五〇年代に、芹沢充寛、井上輝夫らが踏査し、素焼無文の土器片を採集している。

**遺物** 土師器片と判断されているが、破片が小さいため時期は不明である。

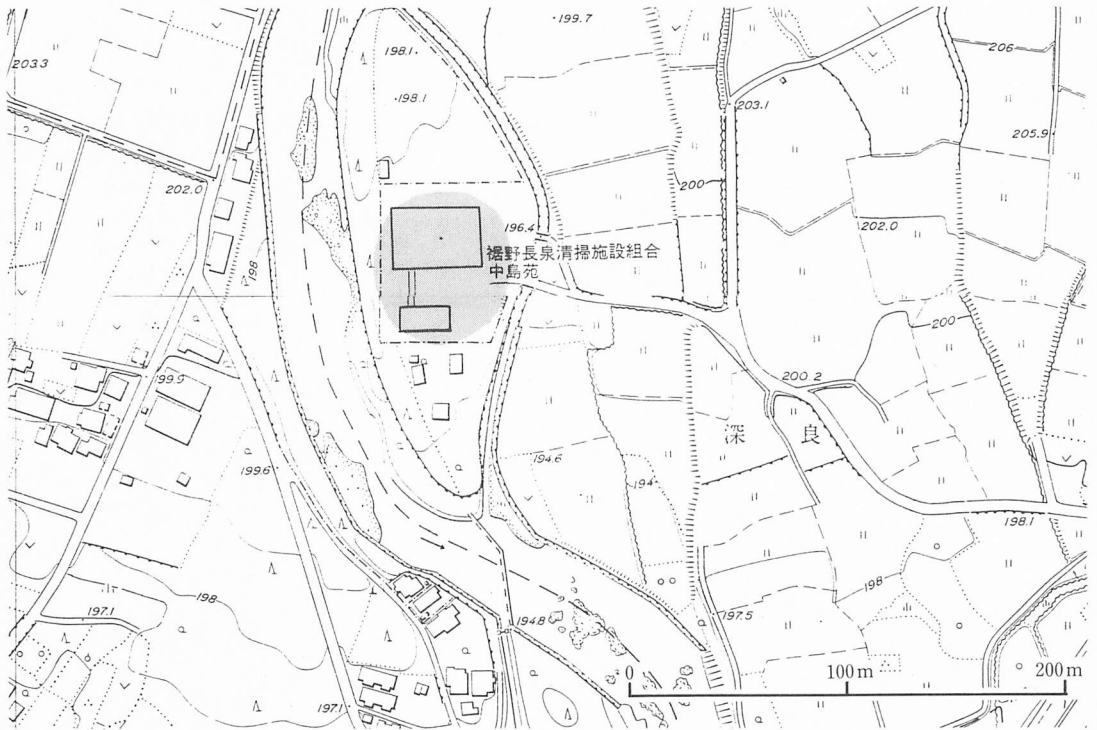
**遺跡の特徴** 本遺跡の南約五〇〇mのところに西原台遺跡があり、古代足柄路に沿った位置にあるため、松葉、上原、町田遺跡と共に、足柄路に関連のある遺跡ではないかと考えられている。

**現状** 水田と畑地であったが、現在、住宅地化している。

所在地 裾野市深良字中島四六番地ほか



位置図



遺跡範囲図



中島遺跡遠望

**位置と立地** 遺物出土地点は、深良中島地区の黄瀬川河岸である。

黄瀬川は、富士山溶岩流の低いところを浸食して流れるが、河道の変遷が著しく、旧河道跡が現在の流路に沿っていく筋かみられる。中島は、こうした現在の流路と東側の旧河道との間にはさまれた、三日月形をした地形のところであり、遺跡は、この中にあったと思われる。

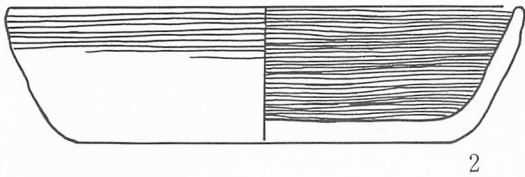
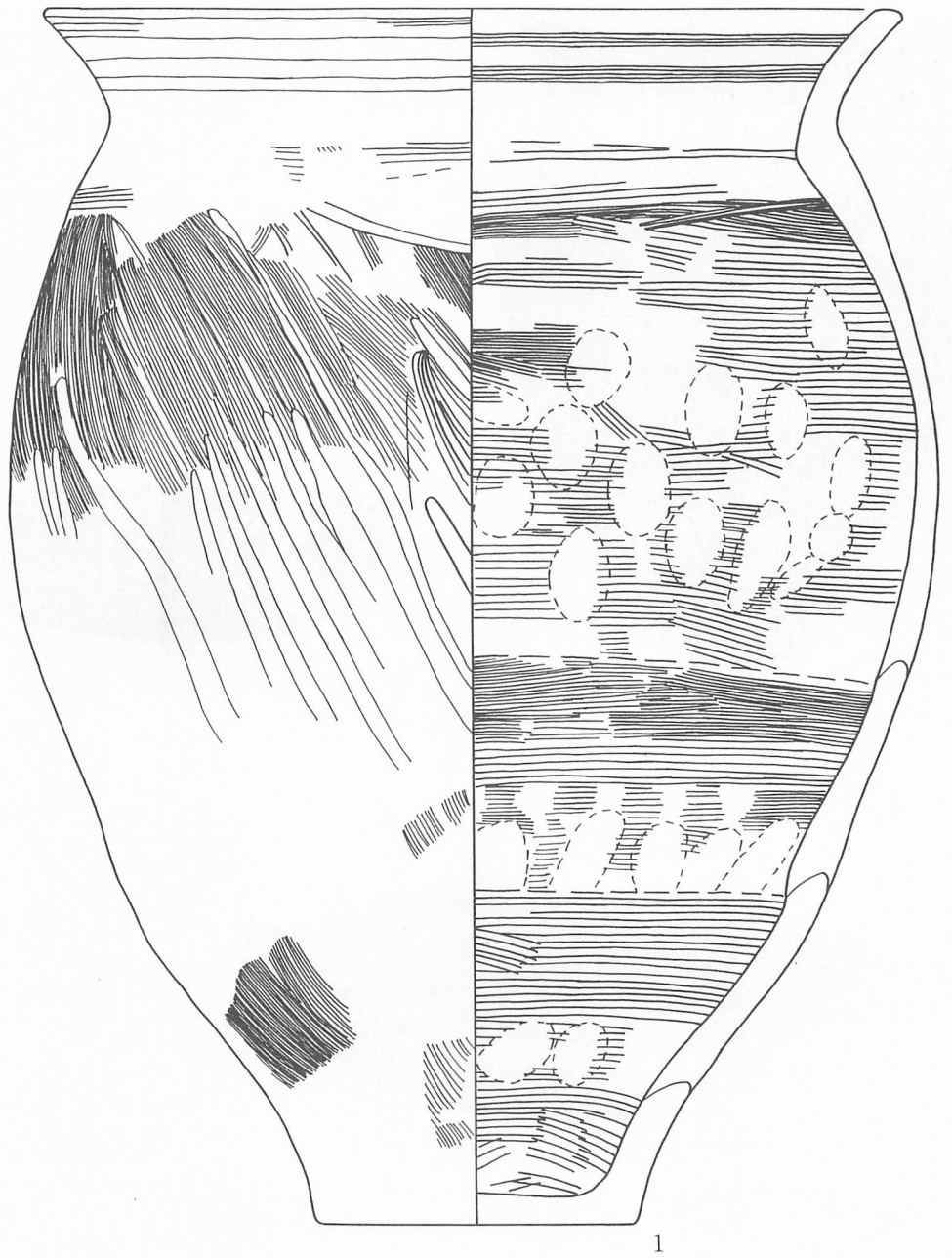
**発見と調査** 遺物は、昭和三〇年代の後半、中島地区の黄瀬川護岸工事中、基盤の富士山溶岩流の上に堆積した砂礫土層の、地表下一・五mのところから出土したという。

**遺物** 図の1は、甕形土器の完形品で、高さ三〇cm、口径二一・四cm、胴最大径二三cm、底径八cmあり、胎土は良質な粘土に若干の細砂が混じり、硬く焼き締まる。刷毛目の上からへらによる斜行のナデ整形がみられる。木葉底である。2は坏で、口径一二・五cm、高さ三・三cmあり、胎土は、良質な粘土で硬く焼き締まる。ロクロ製作で、底はへらで平らに整形する。1・2とも七世紀後半の土師器と思われる。

**遺跡の特徴** 裾野市から沼津市に至る黄瀬川の河岸上には、弥生時代から奈良時代にかけての土器片を出土する遺跡があるが、中島もその一つであるとしてよからう。性格は不明である。

**現状** 裾野長泉清掃施設組合裾野衛生プラントの敷地となっている。

**文献** 芹沢充寛「深良新田中之島遺跡」 裾野郷土研究第3号 裾野郷土研究会 一九六八



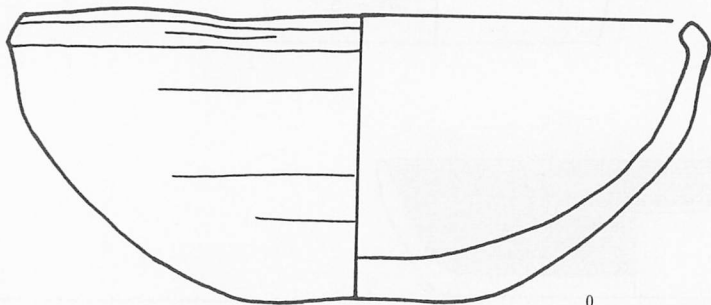
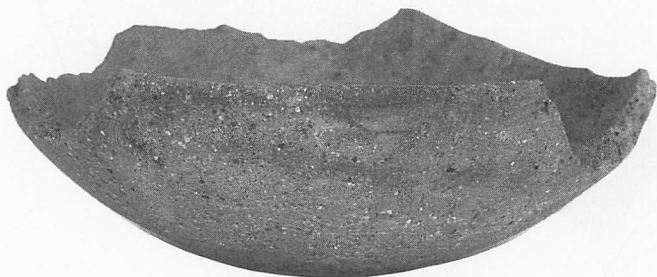
中島遺跡出土土師器実測図



1



2

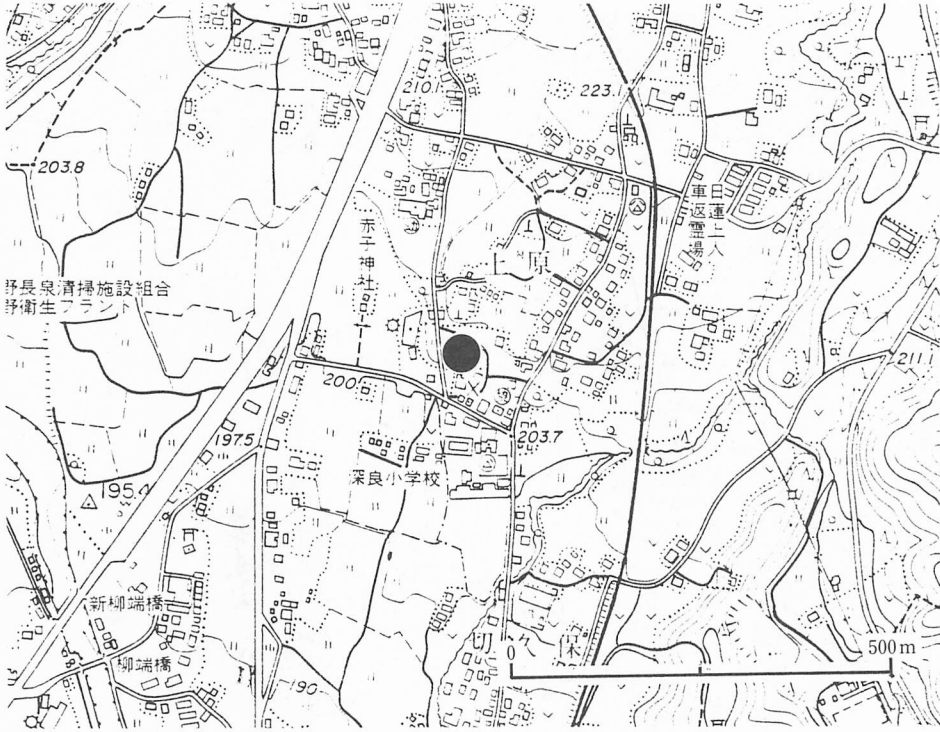


0 5cm

中島遺跡出土土師器

にしほらだい  
西原台遺跡

所在地 裾野市深良字西原台一六〇五番地ほか



位置図

**位置と立地** 箱根山麓と愛鷹山麓との間に広がる、富士山溶岩流の上に形成された台状沖積地の末端部、西原台の海拔二一〇m付近に位置する。台状地形の末端は、かなり急な傾斜をなし、南下の水田平坦面に対している。

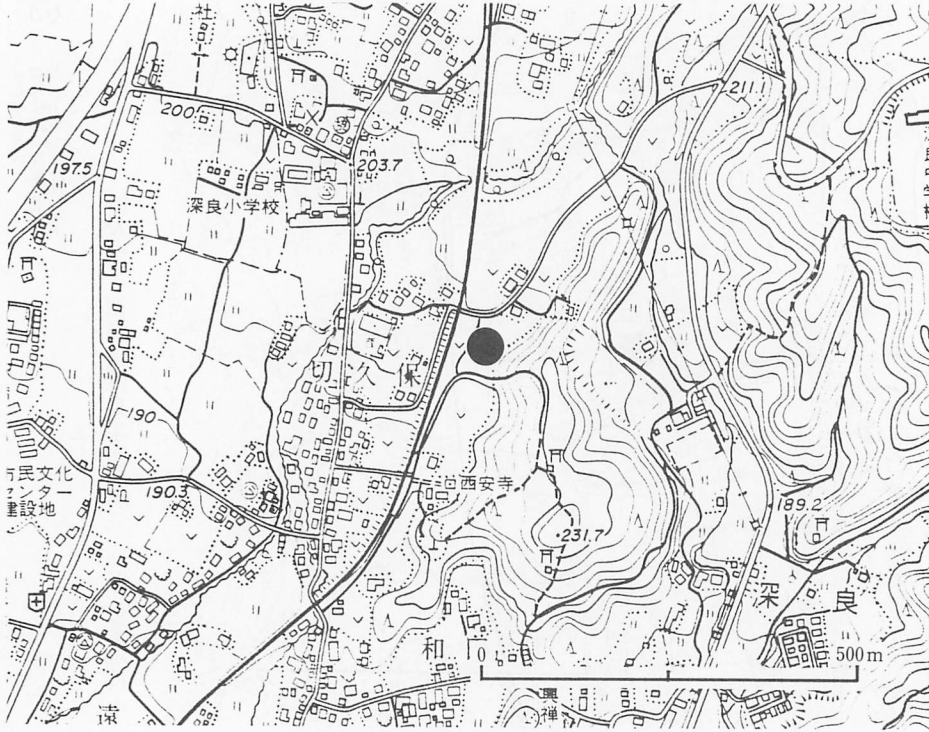
**発見と調査** 昭和五〇年代に、芹沢充寛、井上輝夫らが踏査し、素焼無文の土器片を採集している。

**遺物** 土師器片と判断されているが、破片が小さいため時期は不明である。

**遺跡の特徴** 本遺跡から南約五〇〇mのところに、松葉遺跡があり、古代足柄路に沿った位置にあるため、それに関連する遺跡ではないかと考えられている。

**現状** 住宅地、神社境内などのほかは、畑地となっている。

所在地 裾野市深良字松葉一八七二番地ほか



位置図

**位置と立地** 箱根外輪山の三国山から西方に延びた尾根末端が、山麓を流れる泉川で切りはなされて、通称高雄山という独立した丘陵を形成しているが、本遺跡は、この丘陵の西裾の平坦地、海拔二〇〇m付近に位置し、南北に帯状に広がっている。

**発見と調査** 昭和五〇年代に、芹沢充寛、井上輝夫らが踏査し、素焼無文の土器片を採集している。

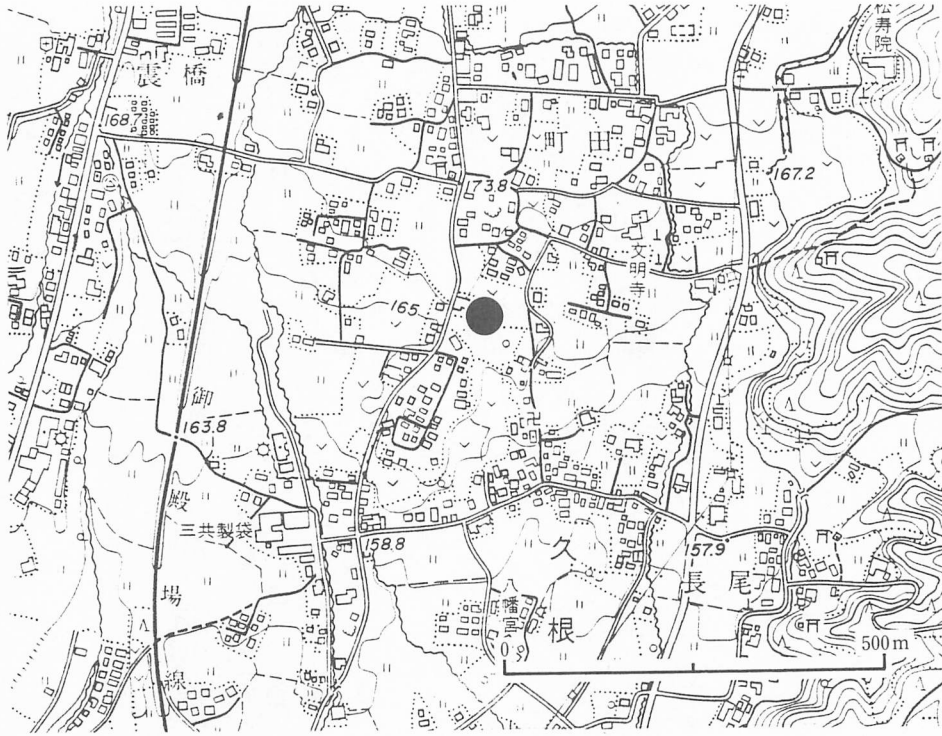
**遺物** 土師器片と判断されているが、破片が小さいため時期は不明である。

**遺跡の特徴** 本遺跡から南約五〇〇mのところ、墨書土器を出土した上原遺跡があり、古代足柄路に沿った位置にあるため、この通路に関連する遺跡ではないかと考えられている。

**現状** 大部分は畑地であるが、一部は住宅地となっている。

町田遺跡  
まちだ

所在地 裾野市深良字町田二五〇九番地ほか



位置図

**位置と立地** 箱根山麓と愛鷹山麓との間に広がる、富士山溶岩流の上に形成された沖積平坦地の深良町田、海拔約一七〇m付近に位置する。この地区は、舌状の微高地が南北に連続し、本遺跡は、そうした微高地上に立地する。

**発見と調査** 昭和五〇年代に、芹沢充寛、井上輝夫らが踏査し、素焼無文の土器片を採集している。

**遺物** 土師器片と判断されているが、破片が小さいため時期は不明である。

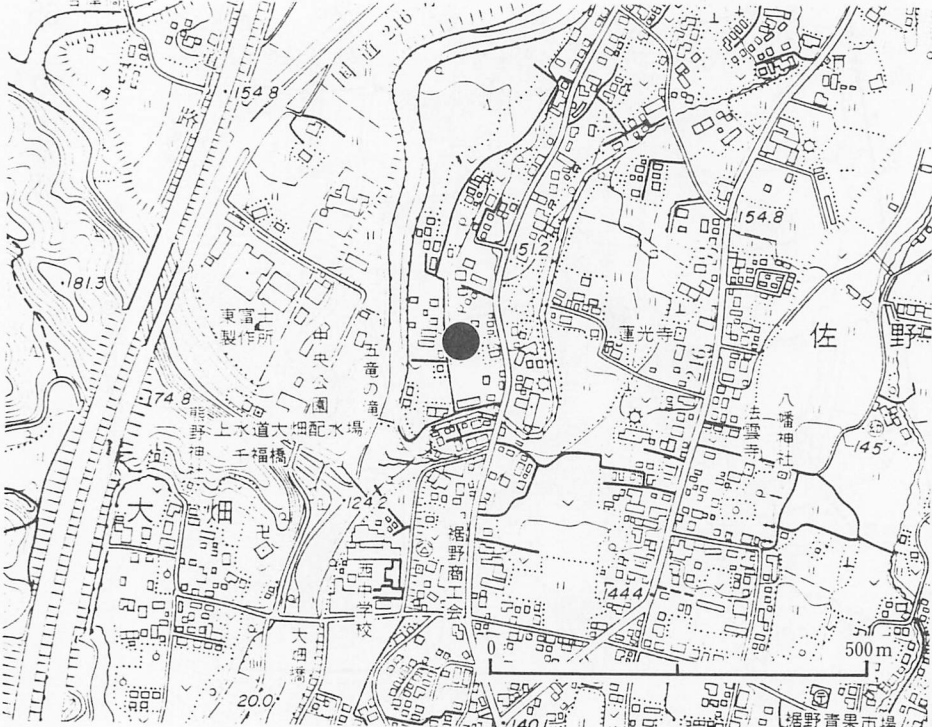
**遺跡の特徴** 墨書土器を出土した上原遺跡の南約五〇〇mのところに位置し、北の松葉遺跡と共に、古代足柄路に関連する遺跡ではないかと考えられている。

**現状** 畑地と水田であったが、現在、宅地化が進んでいる。



五竜の滝上遺跡  
ごりゅう たきゅうえ

所在地 裾野市石脇五竜の滝上八一番地ほか



位置図

**位置と立地** 黄瀬川とその上流の石脇佐野堰で枝分かれた、大柄沢川との間に形成された台状地形の末端、海拔約一四三m付近の五竜の滝上に位置する。

**発見と調査** 昭和五〇年代に、芹沢充寛、井上輝夫らが踏査し、素焼無文の土器片を採集している。

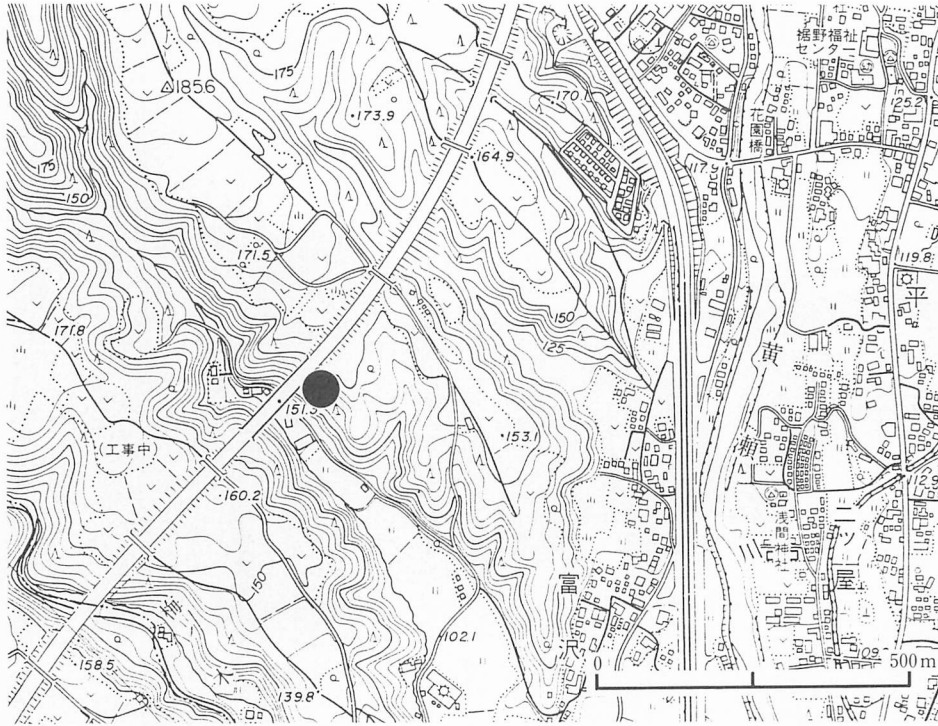
**遺物** 土師器片と判断されているが、破片が小さいため時期は不明である。

**遺跡の特徴** 北方の中島遺跡と共に、黄瀬川河岸の古墳時代遺跡の一つと考えられている。

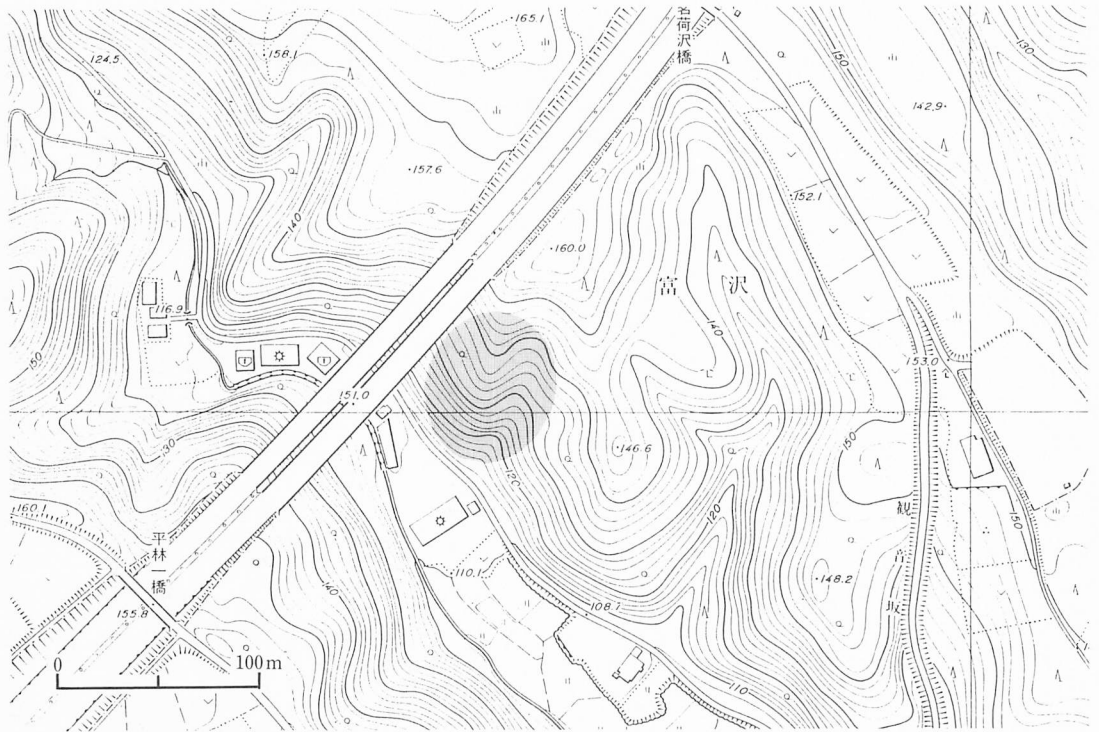
**現状** 畑地であったが、現在、住宅地化している。

ほぞやました  
細山下遺跡

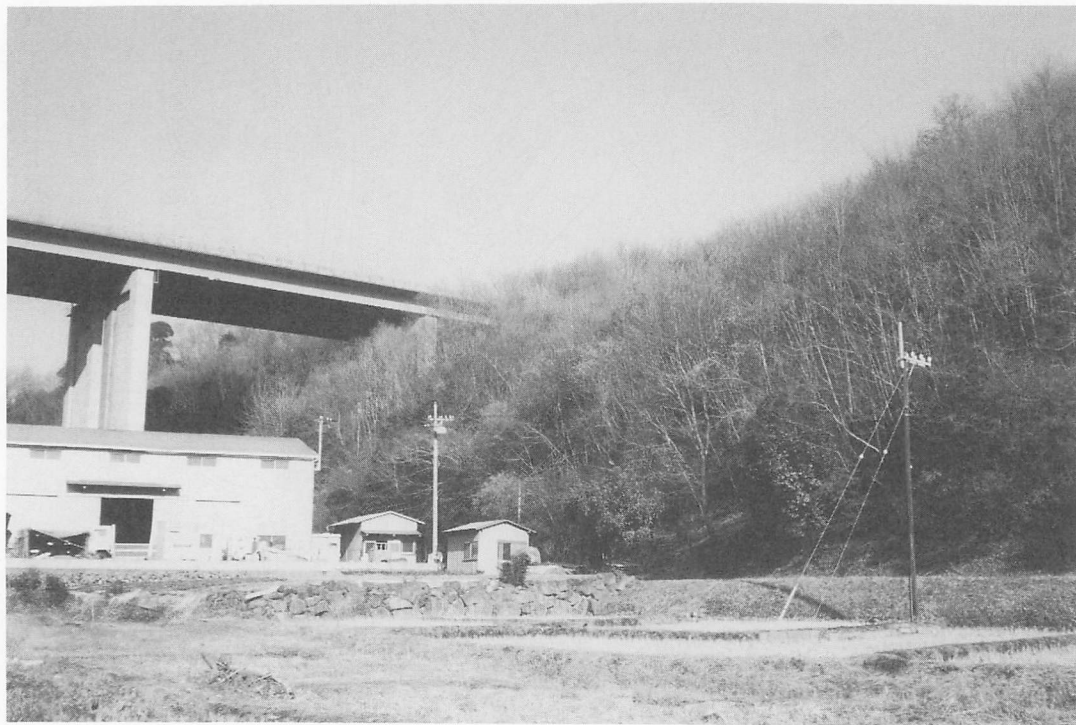
所在地 裾野市富沢字細山五五四番地付近



位置図



遺跡範囲図



細山下遺跡遠望

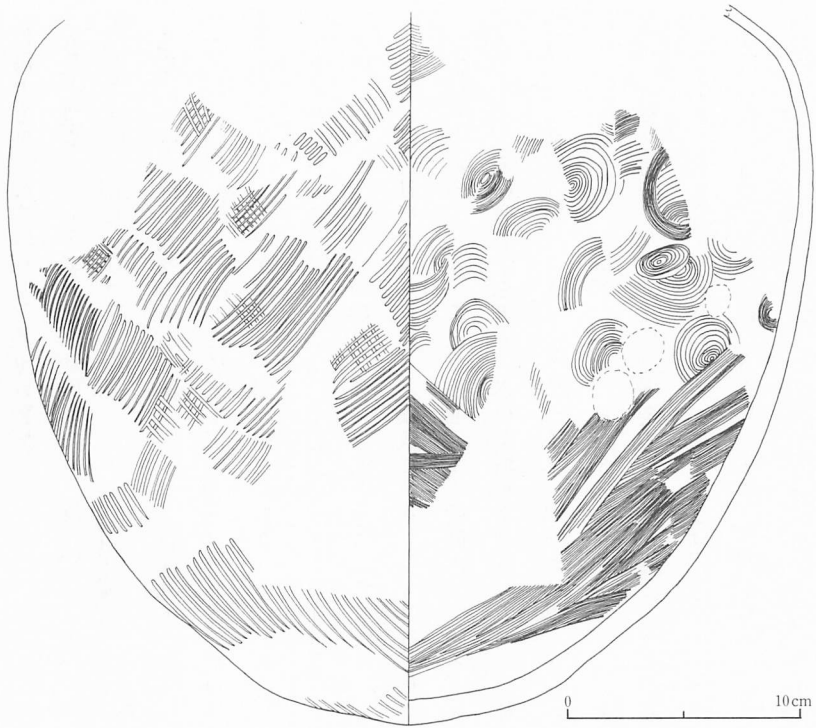
**位置と立地** 愛鷹山の池ノ平から富沢集落に向かって延びる尾根は、稜部に広い平坦面が形成されているが、その末端近くの富沢細山地区の海拔一六〇mのところ、東名高速道路によって切断されている。この切断部の西側は、かなり急斜面となって沢谷に落ち込んでいるが、遺物の出土地点は、この斜面であったとする。

**発見と調査** 遺物は、昭和四四年（一九七〇）頃、東名高速道路の建設工事中に、排土中から発見されたという。

**遺物** 須恵器の胴から底部にかけての破片で、現存の高さ約三二cm、胴部最大径三四cmあり、灰色で硬く焼き締まる。表面は九单位前後の櫛歯状器具による整形痕があり、裏面には渦状痕がみられる。古墳時代後半のものと考えられる。

**遺跡の特徴** 古墳の存在を思わせるが明らかでない。

**現状** 山林と一部は東名高速道路の路線敷となっている。



細山下遺跡出土須恵器実測図



細山下遺跡出土須恵器

所在地 裾野市葛山字下条五七〇番地ほか

位置と立地 縄文時代 下条遺跡参照

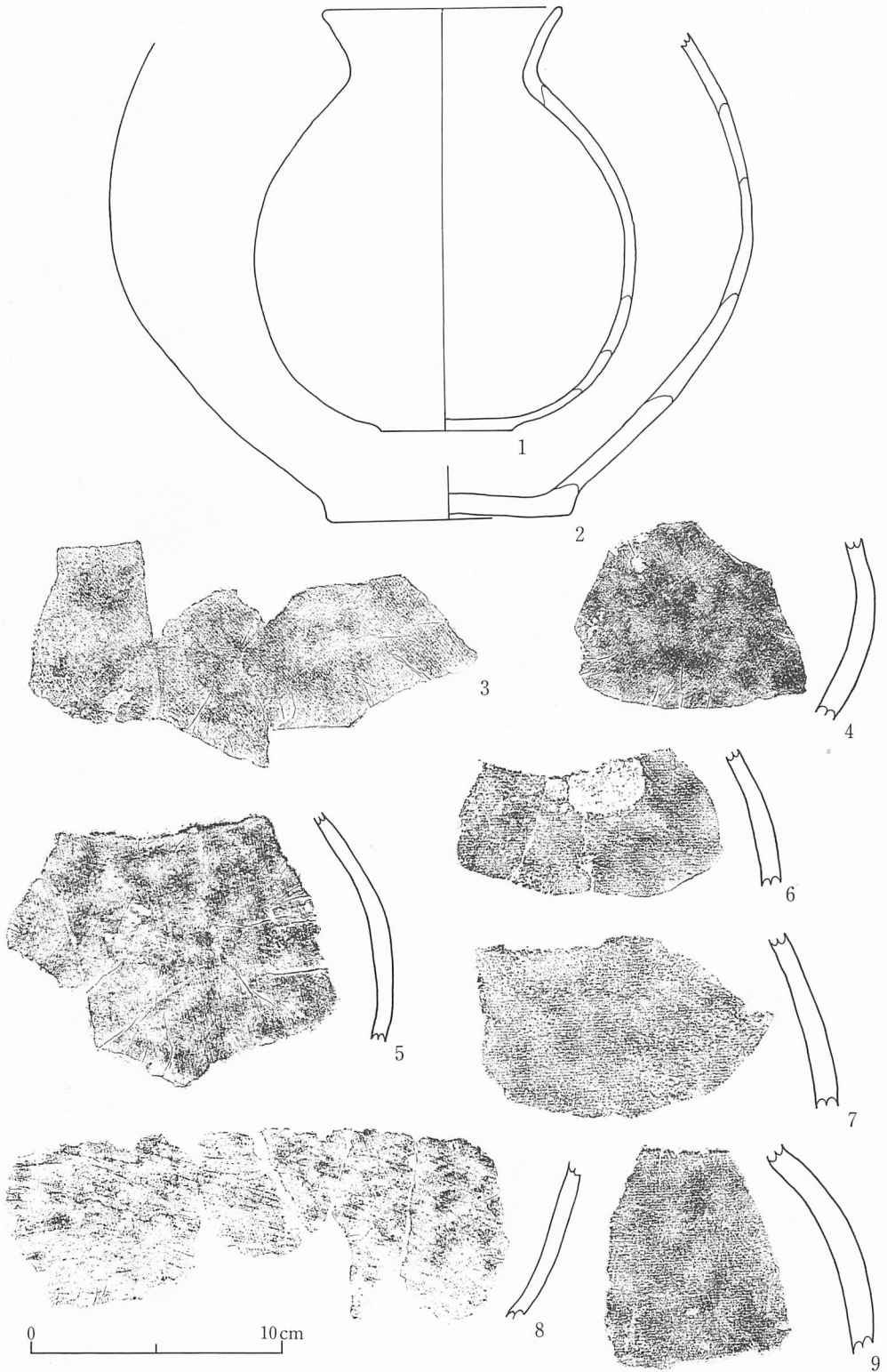
発見と調査 右同項参照 本地区からは、縄文時代の遺物を伴出して、土師器片が出土している。

遺物 すべて採集遺物である。第1図1は、口径九・七cm、高さ一六・六cm、胴径一五・三cm、底径五・三cmの広口小形壺で、胎土に白色石粒を含み、よく焼き締まる。明赤褐色で無文である。2は、胴径二五・六cm、残存の高さ約一九cm、底径九・八cm。壺形土器で、胎土に黒色の石粒を含み、やや砂目が多い。明黄褐色で無文である。底部近くに薄い刷毛目痕がみられる。木葉底である。3〜9は、無文で壺形土器破片であろう。4・5は、表面はよく研磨されている。8はヘラ状器具による整形痕が顕著で、赤色塗料がかけられている。裏面には九単位位の櫛歯状器具による整形痕がある。第2図1は、復原の口径一三cmの壺形土器の口縁部で、胎土に若干の砂目を含み、よく焼き締まる。口縁部内側に九単位前後の横走る櫛目状痕と、外面に横ナデの痕があり、頸部にも櫛目状整形痕がある。2は、胎土にやや砂目があり、石粒を含む。肩部に縄文帯をめぐらす。壺形土器片と思われる。4は、壺形土器の口縁頸部破片で、2の個体と同じものであるらしい。3は、S字状口縁をした破片で、胎土に細かい白色石粒を多量に含み、薄手で硬く焼き締まる。灰白色を呈し、外面に斜行の刷毛目痕が顕著にみられる。3-1〜6までは、3と同一の性質の土器片であるが、

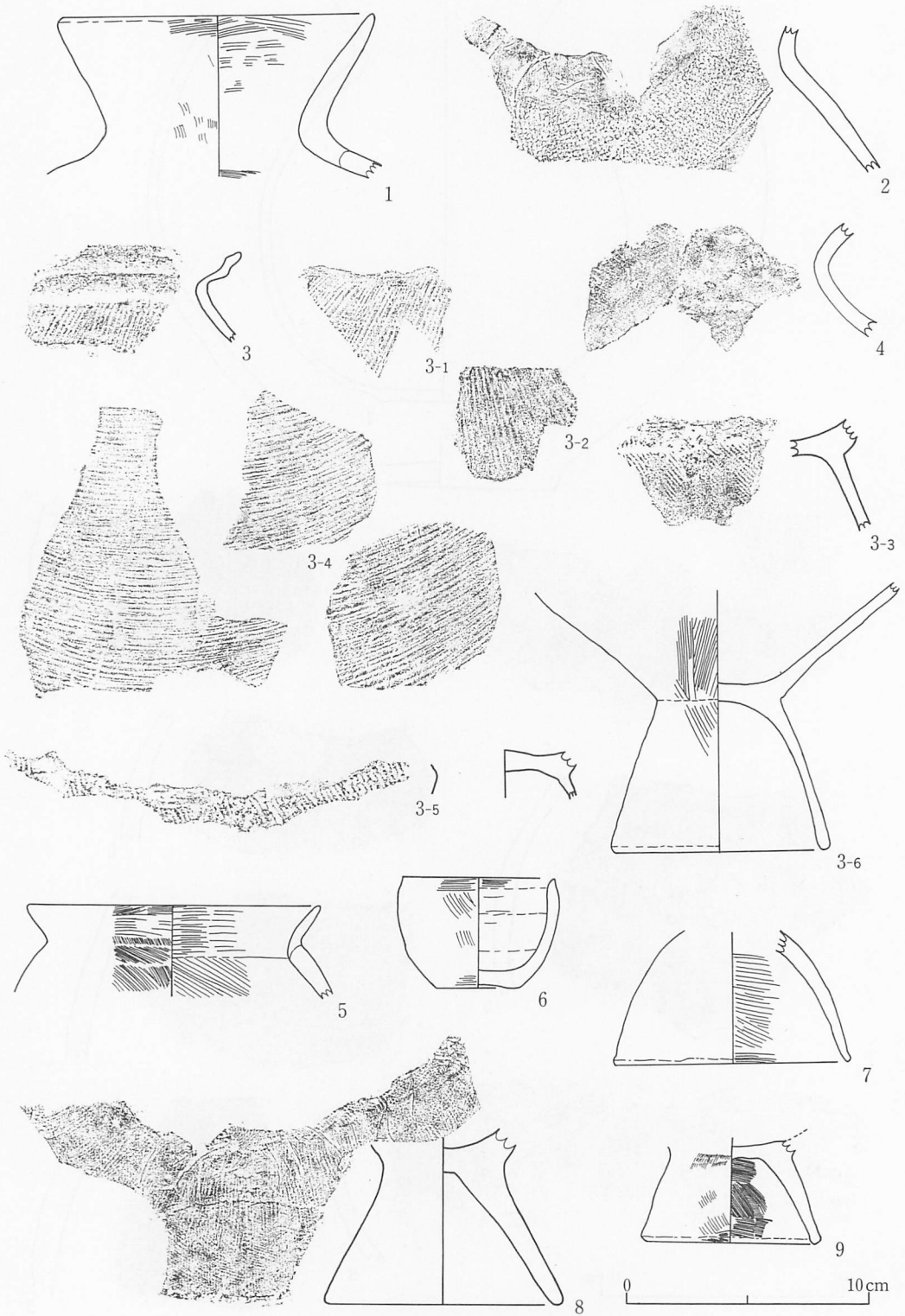
同じ個体ではないらしい。3-6は、台付の底部である。3を復原すると、3-6の台部のついた甕形土器になる。5は、復原の口径一二cmの小形甕の口縁部分で、刷毛目が顕著である。6は、口径五・八cm、高さ四・五cmの手こねと思われる坏である。7〜9は、台付甕形土器の底部である。第3図1は、口径一二・七cm、高さ六・四cm、底径五・四cmの鉢形土器で、復原してある。胎土は良質の粘土で、よく焼き締まる。内外面とも研磨されるが、若干の刷毛状整形痕がみえる。外面に煤状すすのものが付着し黒斑となっている。2・3・5は、高坏の脚部破片で、裝飾に孔があげられている。胎土に少量の白色石粒を含むが良質の粘土で、よく焼き締まり、ヘラによる縦方向の整形痕がある。3は、高さ六・五cm、底径一〇cm、孔の径一cm、赤色である。4

は、小形高坏の坏部で、口径七cm、坏部高さ二cm。5は、3と同形、同質である。6〜11までは、底部破片で、器形の判断は難しく、壺か甕かは明らかでない。11の底面には、ヘラによって描かれたと思われる花状文か波状文らしき文様がある。すべて同時期のものと思われる。一部に弥生時代後期の土器の伝統も残されており、古墳時代の初め頃、四世紀代の土師器と考えられる。

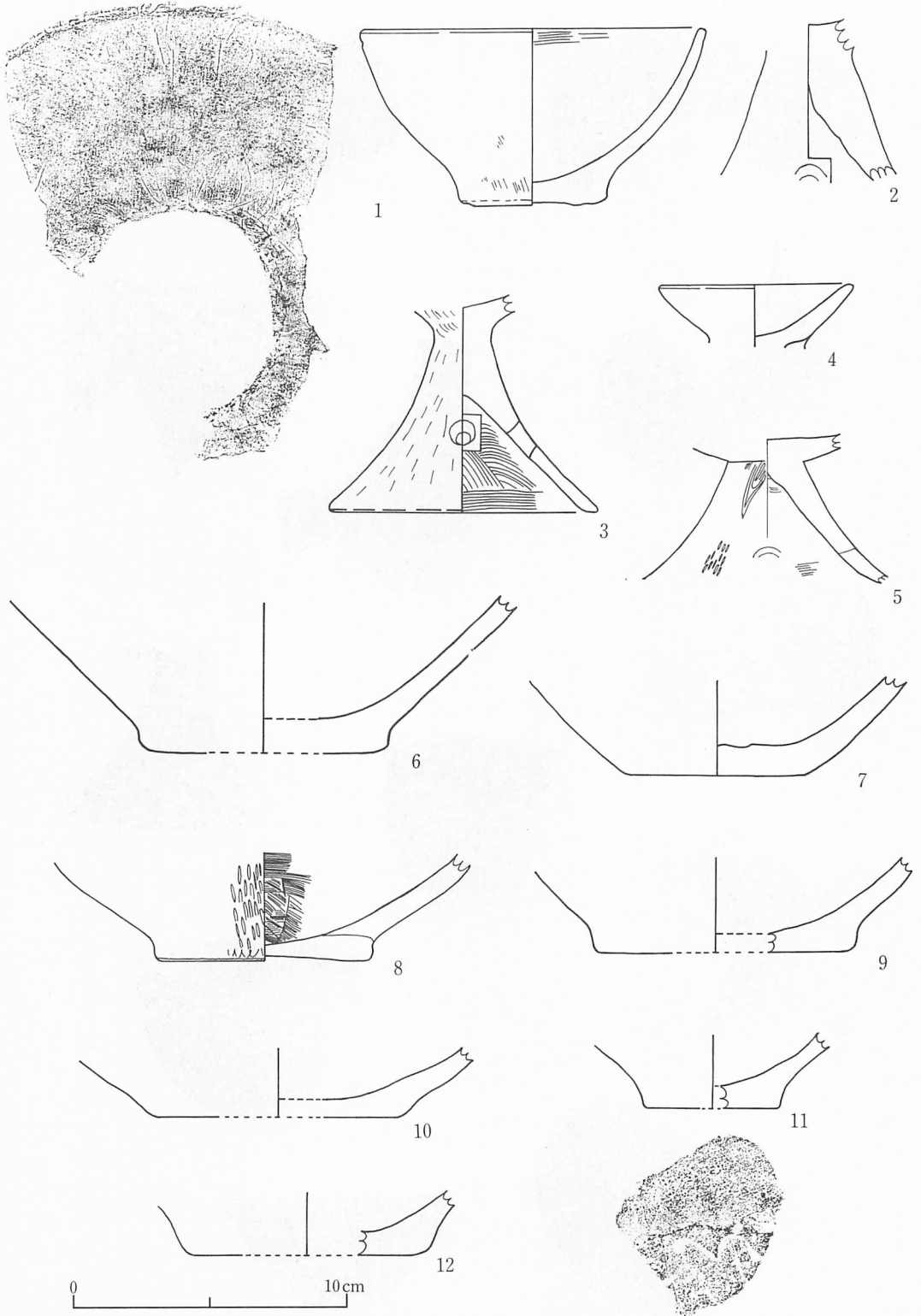
遺跡の特徴 縄文時代遺跡と重複しているが、時間的な隔たりが大きい。土器片は壺、甕、台付甕、有孔脚高坏、鉢、小形坏など組み合わせられており、裾野市内の古墳時代遺跡として注目される。



第1図 下条遺跡採集土師器実測図・拓影

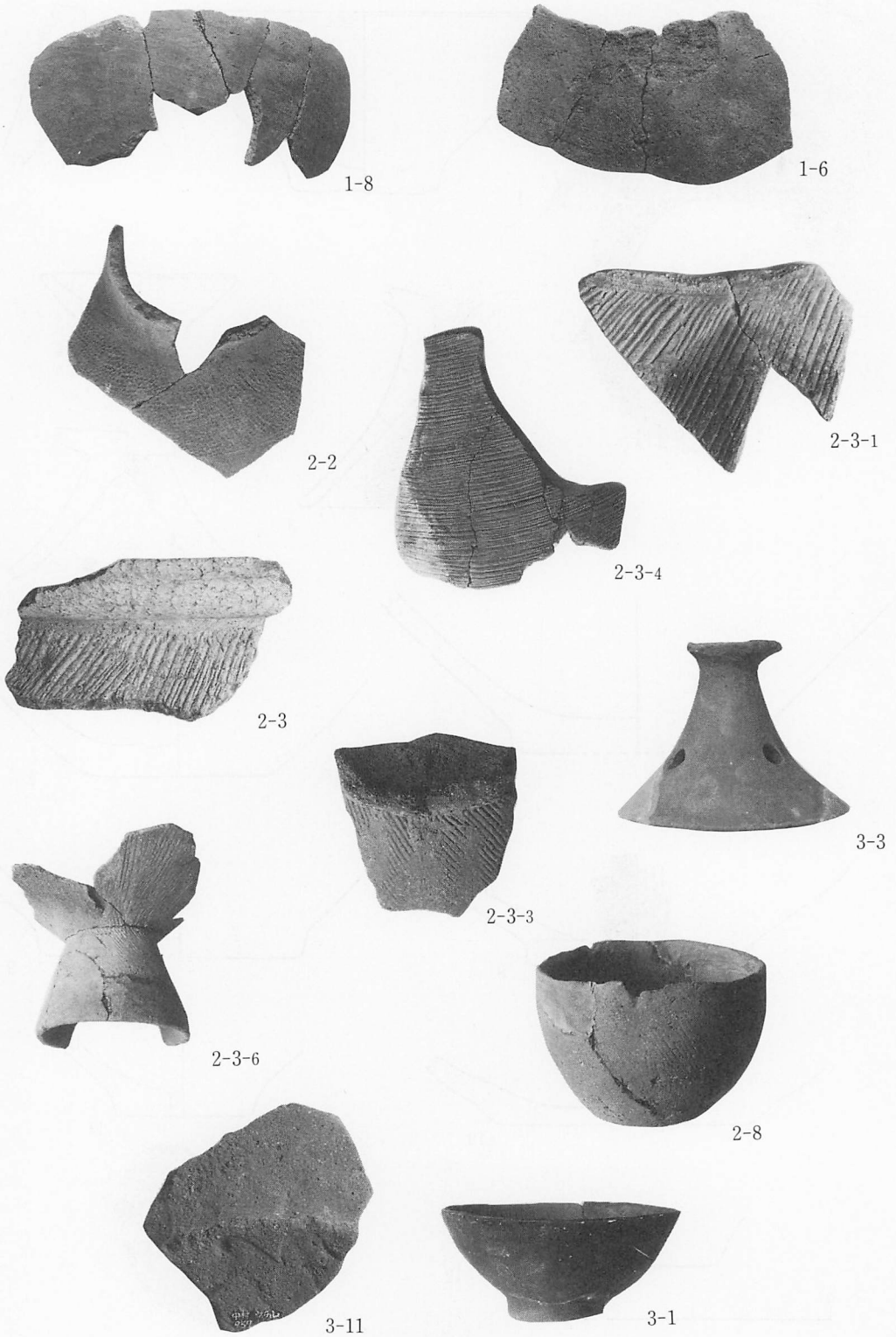


第2図 下条遺跡採集土師器実測図・拓影



第3図 下条遺跡採集土師器実測図・拓影





図版1 下条遺跡採集土師器



図版2 下条遺跡出土土師器

(用語解説)

**土師器** 四世紀頃から一一世紀頃まで作られた素焼の土器をいう。

土師器は、弥生土器の最後の土器から移り変わったもので、その境目の区別は難しい。公文名屯屋敷遺跡、葛山一色原遺跡出土の土師器は富沢原遺跡出土の弥生土器の直後の土器で、お互いに共通する点が多いが、土師器特有の小形丸底土器を伴っているので、土師器の仲間に入れた。日常の用器、祭器として使用され、住居に「かまど」をもつようになると炊飯具としての甑形土器を発達させた。五世紀以後の土師器には、大小の壺、甕のほか、台付の高坏、坏、皿、鉢、碗、塙、釜、かまどまで作られ多様化する。このなかで坏の作りと、形態の移り変わりによって時代区分の目安をたてている。六・七世紀になると、須恵器と併用され、遺跡から両方伴って出土する例が多くなる。この土師器に墨字の書かれたものを、特に墨書土器と呼んでいる。墨書土器は、官庁、寺院などの所属や所有者、使用目的などの表示をしたもので、官庁跡、寺院跡や、その周辺の集落跡から多く出土することが多い。深良上原遺跡出土の墨書土器は、官道である足柄路の通過地点を示すものとして注目される。

## 69 一色原遺跡

いっしきばら

所在地 裾野市葛山字一色原一〇四番地ほか

位置と立地 縄文時代 一色原遺跡参照

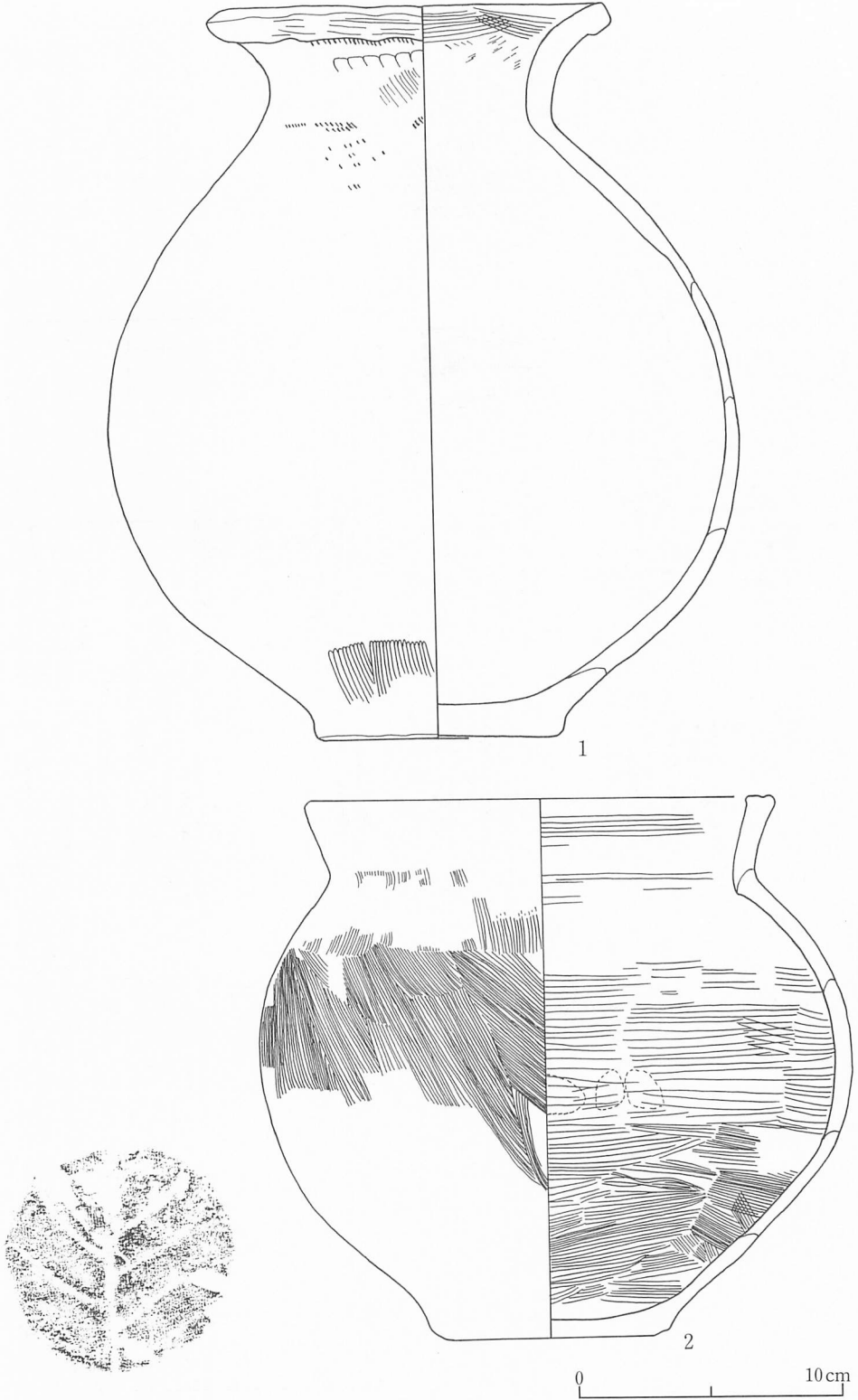
発見と調査 右同項参照

遺物 ほぼ同一の地点から発見されたとする第1図1は、復原の口径一四・五cm、高さ二七・五cm、胴最大径二四cm、底径九・五cmの均整のとれた広口の壺形土器で、胎土に石粒と若干の砂を含み、焼き締まる。口縁は折返し縁帯をつくる。外面と口縁部の内側は研磨されている。肩部から胴部にかけて、ヘラ状器具による斜縦方向の整形痕と、内面に九く一〇単位の櫛齒状器具による横走の整形痕がみられる。2は、口径一八cm、高さ二〇・五cm、胴最大径二二・五cm、底径九cmの安定感のある広口壺形土器で、木葉底である。胎土に白色石粒と砂を含み、焼成はやや不良で、表面にひび割れがみられる。口縁は外方に立ち上がって、平縁帯となっている。外面に一五単位以上の斜行の刷毛目と、内面に一〇単位前後の荒い横走りの刷毛目整形痕がみられる。第2図1は、復原の口径一八・五cmの広口の甕形土器の口縁部破片で、胎土に粗砂粒を含み焼き締まる。口頸部内外面に、目のこまかな横走りの整形痕があり、肩部に斜めの刷毛目の整形痕がある。2・3は、甕形土器の口縁部で、胎土に砂目が入る。2は外面に縦の刷毛目があり、内側は研磨されている。3は内外面とも刷毛目がみられる。4は、壺形土器の折返し口縁部の破片である。5は、復原の口径一二・七cmの壺形土器口縁部の破片で、折返し口縁帯をつくる。胎土に細砂を含

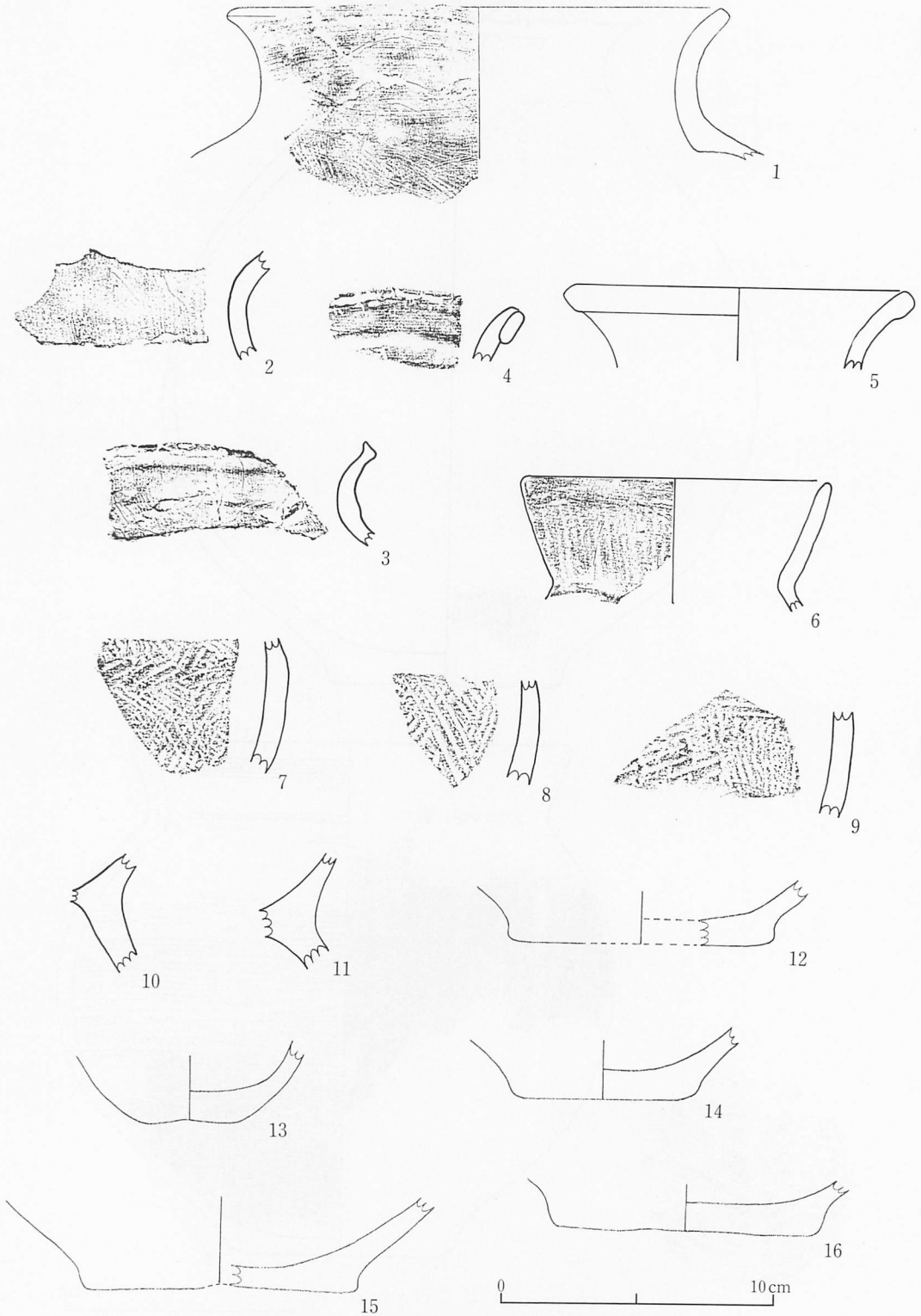
み、赤褐色を呈する。第1図1とほぼ同じである。6は、復原の口径一一・四cmの壺形土器口縁部破片で、直に立ち上がって外反する。胎土に黒色の石粒を含み、砂目が多くザラつく。外面は縦方向に、内面は横方向の荒い刷毛目がある。7く9は、刷毛状器具の整形痕からみると、6の個体の破片らしくみえるが、胎土に若干の相違がみられる。10・11は、台付甕形土器の基部破片であろう。13は、小形丸底土器の底部破片と思われる。胎土に白色石粒を含み砂目が多いが、よく焼き締まり、内外面とも研磨されている。12・14く16は、底部破片であるが、壺か甕か判断がつけ難い。遺物の特徴から四く五世紀代の土師器であろうと思われる。

遺跡の特徴 本遺跡の南に続いて土師器の発見された下条遺跡があり、葛山地区開拓の時点を示す遺跡とみてよからう。両遺跡とも台状地形上に位置し、生産の対象がなんであったか不明である。また、縄文時代遺跡と重複するが、土器の出土地点が違っているとす。

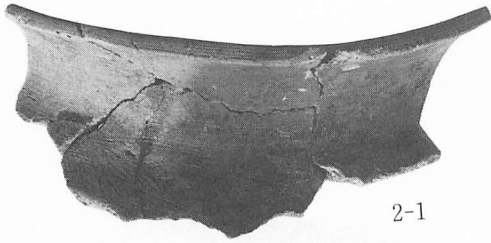
現状 芝畑、住宅地となっている。



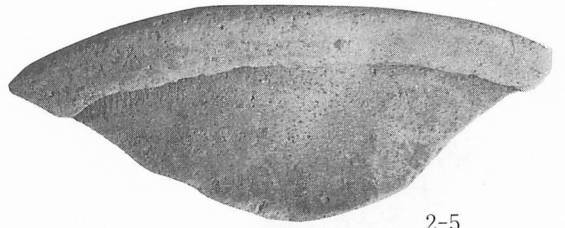
第1図 一色原遺跡出土土師器実測図・拓影



第2図 一色原遺跡出土土師器拓影・実測図



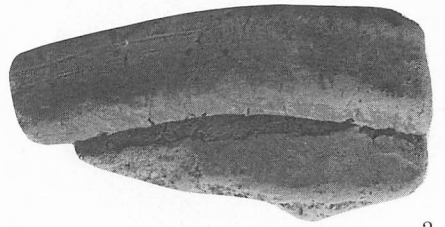
2-1



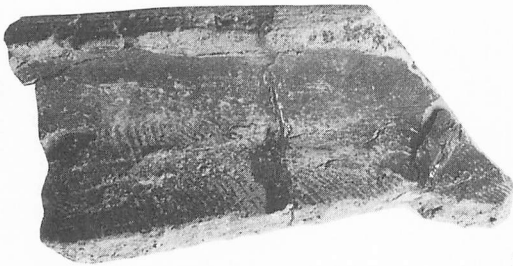
2-5



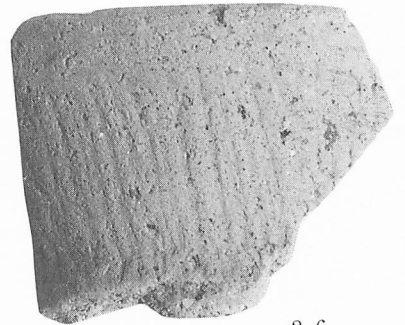
2-2



2-4



2-3



2-6



2-7



2-8

一色原遺跡出土土師器



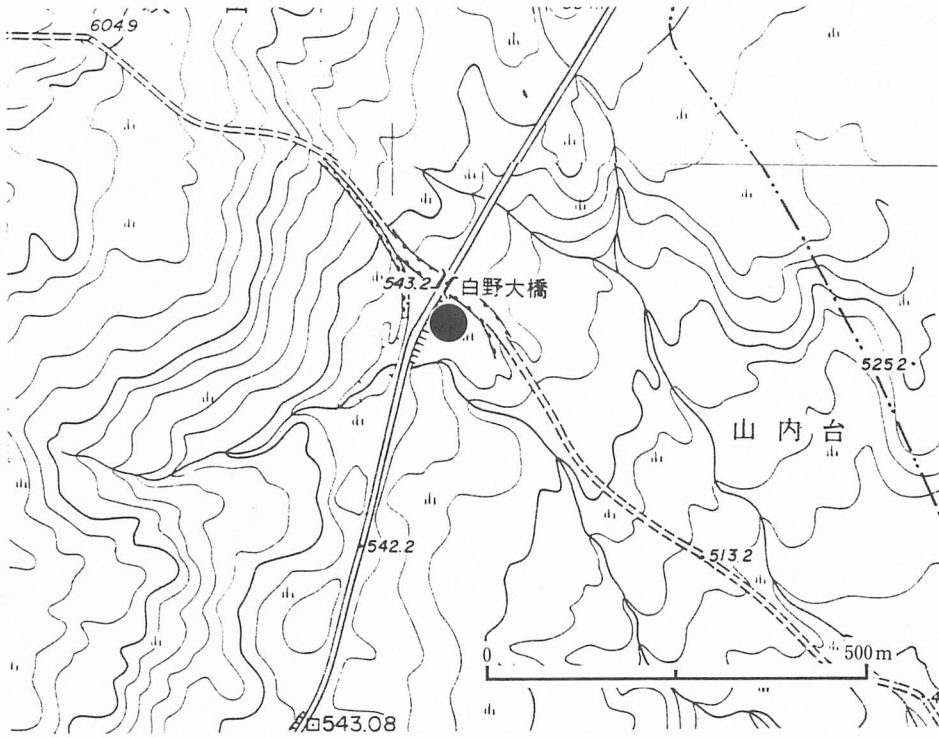
一色原遺跡出土土師器

(用語解説)

**刷毛目** 弥生土器や土師器の土器面の説明によく使われる。剛毛状の刷毛やヒノキ、スギ、アスナロ、ヒバなどの、柁目の細かいものをへら状の薄板にし、先端を刷毛状にした器具で、土器面を調整や整形したときにできた跡をいう。刷毛目は四単位のものから十単位以上の幅広いものまであり、条痕のような荒いものから、目の細かい微細線のものまである。

おおのはら  
大野原遺跡

所在地 裾野市須山白野



位置図

**位置と立地** 須山津土井から、富士山東南麓を横断する主要地方道富士・御殿場線の須山白野大橋の東南側、海拔五三七m付近に位置する。

**発見と調査** 須山在住の富士山資料館長渡辺徳逸が、この付近から素焼無文の坏を採集している。土師器と思われる。

**遺跡の特徴** 富士山麓の高所の遺跡として注目される。富士山麓の高所の遺跡として、富士市千束があり、ここからは土師器破片と共に鉄滓（金くそ）が出土している。

**現状** 山林と草地である。